

日蓮大聖人御書全集

かいもくしょう

じよう

げ

開目抄（上・下）

かいもくしょうじょう

開目抄上

夫れ、一切衆生の尊敬すべき者三つあり。いわゆる主・
師・親これなり。また習学すべき物三つあり。いわゆる儒・
外・内これなり。

儒家には、三皇・五帝・三王、これらを天尊と号す。諸臣
の頭目、万民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず、人皆
禽獸に同じ。五帝已後は父母を弁えて孝をいたす。いわ
ゆる、重華はかたくなわしき父をうやまい、沛公は帝とな
頑

つて太公を挙す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形
をきざめり。これらは孝の手本なり。

比干は殷の世のほろぶべきを見て、しいて帝をいさめ、
頭をはねらる。弘演といいし者は、懿公の肝をとつて我が

腹をさき肝を入れて死しぬ。これらは忠の手本なり。

尹寿は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、

老子は孔子の師なり。これらを四聖とぞうす。天尊頭を
かたぶけ、万民掌をあわす。

これらの聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。

その所詮は三玄をいです。三玄とは、一には有の玄、周公等これを立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、莊子が玄これなり。玄とは黒なり。父母未生已前をたずぬれば、あるいは元氣よりして生じ、あるいは貴賤・苦樂・是非・得失等は皆自然なり等云々。

かくの「とく巧みに立つといえども、いまだ過去・未來を一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり、かるがゆえに玄という。ただ現在ばかりしれるににたり。現在において仁・義を制して、身をまほり、國を安んず。これに相違すれば族を

亡

いえ

ほろ

とう

けんせい

ひとびと

せいじん

ほろぼし家を亡ぼす等いう。これらの賢聖の人々は、聖人な

りといえども、過去をしらざること等いう。

かがみざること盲人の前をみざるがごとし。ただ現在に家を

鑑かにもうじんまえ

かがみざること凡夫の背をみず、未来を

おさくにかた

じょう

ぎょう

ほうばい

ほうばい

敬

治め孝をいたし堅く五常を行すれば、傍輩もうやまい、名

も国にきこえ、賢王もこれを召してあるいは臣となし、あ

るいは師とたのみ、あるいは位をゆずり、天も来つて守り

仕しゅうふおう

くらい

議

てん

きた

まも

つかう。いわゆる、周の武王には五老きたりつかえ、後漢

の光武には二十八宿來つて二十八将となりし、これなり。

しかりといえども、過去・未来をしらざれば、父母・主君・

かこみらい

ふぼ

しゅくん

かこみらい

ししょう ごせ 助
ふちおん もの
けんせい
師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖にあらず。

こうし
孔子が「この土に賢聖なし。西方に仏団」という者あり。

さいほう ふと もの
けんせい
これ聖人なり」といて、外典を仏法の初門となせし、こ

げてん ぶっぽう
れいがくとう おし
これなり。礼樂等を教えて、内典わたらば戒・定・慧をしり

ないてん
おうしん おし
やすからせんがため、王臣を教えて尊卑をさだめ、父母を教

じしよう
おし
えて孝の高きことをしらしめ、師匠を教えて帰依をしらし

みようらくだいしい
ぶつきよう
るけ
じつ
よ
れいがくさき
む。妙樂大師云わく「佛教の流化、実にここに頼る。礼樂前

は
しんどうのち ひら
とううんぬん
に駆せて、真道後に啓く」等云々。

てんだいい

こんこうみょうきょう

い

いつさいせけん

天台云わく「金光明經に云わく『一切世間のあらゆる

ぜんろん

みな

きょう

よ

ふか

せほう

し

すなわ

善論は、皆この經に因る。もし深く世法を識らば、即ちこ

ぶつぱう

とううんぬん

しかん

われ

さんせい

つか

わ

くわ

れ仏法なり」と等云々。止觀に云わく「我、三聖を遣わし

か

しんたん

け

とううんぬん

ぐけつ

い

しょ

う

て、彼の真丹を化す」等云々。弘決に云わく「清淨法行經

い

がつこうぼさつ

がんかい

しょ

う

じょ

う

に云わく『月光菩薩は、かしこに顔回と称し、光淨菩薩は、

ちゅうじ

しよう

かしょうぼさつ

がんかい

しょ

う

う

かしこに仲尼と称し、迦葉菩薩は、かしこに老子と称す』。

てんじく

しんたん

さ

天竺よりこの震旦を指して、かしことなす』等云々。

に

がっし

げどう

きんもくはっぴ

まけいしゅらてん

びちゅうてん

二には月氏の外道。三目八臂の摩醯首羅天、毘紐天、こ

にてん

いつさいしゅじょう

じふ

ひも

てんそん

しゅくん

ごう

の二天をば、一切衆生の慈父・悲母、また天尊・主君と号

か び ら う る そ う ぎ ゃ ろく し ゃ ば さ ん に ん き ん せ ん 名
す。迦毘羅・漚樓僧法・勒婆婆、この三人をば、三仙となづ
く。これらは仏前八百年已前已後の仙人なり。
この三仙の所説を四韋陀と号す。六万藏あり。乃至、仏
出世に当たつて、六師外道この外經を習伝して、五天竺の
王の師となる。支流九十五・六等にもなれり。一々に流々
多くして、我慢の幢高きこと非想天にもすぎ、執心の心
の堅きこと金石にも超えたり。その見の深きこと、巧みな
るさま、儒家にはに入るべくもなし。あるいは過去二一生三生
ないしちしおう は ち ま ん ご う し ょ う け ん か こ に し ょ う さ ん し ょ う
乃至七生、八万劫を照見し、また兼ねて未來八万劫をし

と

ほうもん ごくり

いん なか か

いん

なか

か

る。その説くところの法門の極理は、あるいは「因の中に果
有り」、あるいは「因の中に果無し」、あるいは「因の中に、
また果有りまた果無し」等云々。これ外道の極理なり。

いわゆる、善き外道は、五戒十善戒等を持つて有漏の
禪定を修し、上、色・無色をきわめ、上界を涅槃と立て
て屈歩虫のごとくせめのぼれども、非想天より返つて
三悪道に墮つ。一人として天に留まるものなし。しかれど
も、天を極むる者は永くかえらずとおもえり。

各々自師の義をうけて堅く執するゆえに、あるいは冬の
おのおの じし ぎ

さむ いちにち さんどごうが よく かみ 拠
寒きに一日に三度恒河に浴し、あるいは髪をぬき、あるいは
は巖に身をなげ、あるいは身を火にあぶり、あるいは五処
をやく。あるいは裸形。あるいは馬を多く殺せば福をう。
あるいは草木をやき、あるいは一切の木を札す。これらの
邪義、その数をしらず。師を恭敬すること、諸天の帝釈を
うやまい、諸臣の皇帝を挙げるがごとし。しかれども、外道
の法九十五種、善惡につけて一人も生死をはなれず。善師
につかえては二生三生等に悪道に墮ち、悪師につかえては
順次生に悪道に墮つ。

げどう しょせん ないどう い すなわ きいよう

げどう ひやくねん

げどう い

外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。ある外道云わく

「千年已後、仏世に出ず」等々。ある外道云わく「百年

とううんぬん

げどう い

已後、仏世に出ず」等々。大涅槃經に云わく「一切世間

だいねはんぎょう い いつきいせけん

とう じやけん

そう

の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」等
みな ぶつせつ げどう せつ

うんぬん ほけきよう い しゆ さんどくあ

しだれ じめ

とう

じやけん そう

とう

云々。法華經に云わく「衆に三毒有りと示し、また邪見の相

げん わ でし ほうべん しゅじょう ど

とう

とう

とう

とう

とう

を現す。我が弟子はかくのごとく、方便もて衆生を度す」

とううんぬん

等々。

さん だいかくせそん いっさいしゅじょう だいどうし だいがんもく

三には、大覺世尊はこれ一切衆生の大導師・大眼目・

だいきようりよう だいせんし だいふくでんとう

げてん げどう しせい さんせん

大橋梁・大船師・大福田等なり。外典・外道の四聖・三仙、

その名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫、その名
は賢なりといえども実には因果を弁えざること嬰兒のご
とし。彼を船として生死の大海上をわたるべしや。彼を橋と
して六道の巷こえがたし。我が大師は、変易すらなおわた
り給えり、いわんや分段の生死をや。元品の無明の根本な
おかたぶけ給えり、いわんや見思の枝葉の麿惑をや。
この仏陀は、三十成道より八十御入滅にいたるまで
五十年が間、一代の聖教を説き給えり。一字一句、皆真言
なり。一文一偈、妄語にあらず。外典・外道の中の聖賢の言

言

誤

じ

こころ

あい
あ

すら、いうことあやまりなし。事と心と相符えり。いわん
や、仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人。されば、一代
五十余年の説教は、外典・外道に対すれば大乗なり、大人
の実語なるべし。初成道の始めより泥洹の夕べにいたるま
で、説くところの所説、皆真実なり。

ただし、仏教に入つて五十余年の経々、八万法藏を勘
えたるに、小乗あり大乗あり、権経あり実経あり。
顕教・密教、軟語・麤語、実語・妄語、正見・邪見等の
種々の差別あり。ただ法華経ばかり教主釈尊の正言なり、

三世十方の諸仏の真言なり。大覺世尊は、四十余年の年限を
指して、その内の恒河の諸經を「いまだ真実を顯さず」、
八年の法華は「要ず當に真実を説きたもうべし」と定め給
いしかば、多宝仏大地より出現して「皆これ真実なり」と
証明す。分身の諸仏來集して長舌を梵天に付く。この
言、赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中
の満月のごとし。仰いで信ぜよ。伏しておもうべし。
ただし、この經に二箇の大事あり。俱舍宗・成實宗・
律宗・法相宗・三論宗等は名をもしらず。華嚴宗と

しんごんしゅう

にしゅう

ぬす

じしゅう

こつもく

いちねん

さんぜん ほうもん

ほけきょう ほんもんじゅりようほん もん そこ

沈

三千の法門は、ただ法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり。竜樹・天親、知つてしかもいまだひろいいださず。

ただ我が天台智者のみ、これをいだけり。

一念三千は十界互具よりことはじまり。法相と三論とは、八界を立てて十界をしらず。いわんや互具をしるべし

や。俱舎・成実・律宗等は、阿含經によれり。六界を明らかめて四界をしらず。「十方にただ一仏のみ有り」とて「一方に仏有り」とだにもあかさず。「一切の有情、ことぞ」とく

ほとけあ

明

いっさい

うじょう

いっぽう

ぶつしょう あ

説

いちにん ぶつしょう

許

仮性有り」と、そとがざらめ。一人の仮性なおゆるさず。

しかるを、律宗・成実宗等の「十方に仏有り」「仮性有り」など申すは、仏の滅後の人師等の、大乗の義を自宗に盗み入れたるなるべし。

例せば、外典・外道等は、仏前の外道は執見あさし。仏後の外道は、仏教をききみて自宗の非をしり、巧みの心

出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もつともふかし。附仏教・学仏法成等これなり。外典もまたまたかく

のごとし。漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家・道家は、

かんど

ぶっぽう

渡

とき

じゅか

どうか

悠々

えいじ

果

無

ごかんいご

ゆうゆうとして嬰兒のごとくはかなかりしが、後漢已後に
しゃつきよう
しやつきよう

釈教わたりて対論の後、釈教漸く流布するほどに、
しゃつきよう
そなりよ
はかい

釈教の僧侶、破戒のゆえに、あるいは還俗して家にかえ
ぞく
こころ
しがん
だいご
い
げんぞく
いえ

り、あるいは俗に心をあわせ、儒道の内に釈教を盗み入
じゅどう
うち
しゃつきよう
ぬす
い

れたり。止觀の第五に云わく「今世に多く惡魔の比丘有つ
かい
しりぞ
いえ
かえ
いま
よ
おお
あくま
びくあ

て、戒を退き家に還り、驅策を懼畏して、さらに道士に越済
みょうり
もと
たか
お
ひく
ふっぽう
ぎ
どうし
おっさい

し、また名利を邀めて莊・老を誇談し、仏法の義をもつて偷
じやてん
お
ひく
つ
たつと
くだ
ぬす

んで邪典に安き、高きを押して下きに就け、尊きを擢いて
いや
い
がい
びょうどう
うんぬん
ぐ
い

卑しきに入れ、概して平等ならしむ」云々。弘に云わく

「比丘の身と作つて仏法を破滅す。もしは『戒を退き家に
還る』は衛元嵩等がごとし。即ち在家の身をもつて仏法を
破壊す。この人、正教を偷窃して邪典に助添す。『高き
を押す』等とは、道士の心をもつて二教の概となし、邪正
をして等しからしむ。義としてこの理無し。かつて仏法に入
つて正を偷んで邪を助け、八万・十二の高きを押して五千・
二篇の下きに就け、もつて彼の典の邪鄙の教えを釈するを
『尊きを摧いて卑しきに入る』と名づく』等云々。この釈
を見るべし。次上の心なり。

ぶつきょう

仏教またかくのゞとし。後漢の永平に漢土に仏法わたり

じやてん 破

ないてんた

ないてん

なんさんほくしち

いしゅう 起

て、邪典やぶれて内典立つ。内典に南三北七の異執おこり

らんぎく

て蘭菊なりしかども、陳・隋の智者大師に打ちやぶられて、

ぶっぽうふた

ぐんるい

救

仏法一たび群類をすくう。

のち

ほつそうしゅう

しんごんしゅう

てんじく

渡

けごんしゅう

その後、法相宗・真言宗、天竺よりわたり、華嚴宗ま

しゅつたい

しゅうじゅう

なか

ほつそうしゅう

いつこう

た出来せり。これらの宗々の中に、法相宗は一向

てんだいしゅう

かたき

な

しゅう

ほうもんすいか

天台宗に敵を成す宗、法門水火なり。しかれども、玄奘

さんぞう

じおんだいし

いさい

てんだい

おんしゃく

み

じしゅう

三藏・慈恩大師、委細に天台の御釈を見けるほどに、自宗

じやけん

翻

故

じしゅう

捨

の邪見ひるがえるかのゆえに、自宗をばすてねども、その

ころてんだい きぶく み

心 天台に帰伏すと見えたり。

けごんしゅう しんごんしゅう もと ごんきょう ごんしゅう ぜんむい

華厳宗と真言宗とは、本は權經・權宗なり。善無畏

さんぞう こんごうちさんぞう てんだい いちねんさんぜん ぎ ぬす 取 じしゅう

三藏・金剛智三藏、天台の一念三千の義を盜みとつて自宗の

かんじん うえ いん しんごん くわ ちようか こころ 起

肝心とし、その上に印と真言とを加えて超過の心をおこす。

しきい がくしゃとう てんじく だいにちきょう いちねんさんぜん

その子細をしらぬ学者等は、「天竺より大日經に一念三千

ほうもん こうろ たく えし けごんしゅう もん てんだい いちねん

の法門ありけり」とうちおもう。華厳宗は、澄觀が時、

けごんきょう こうろ ぬす い ひと えし けごんしゅう もん てんだい いちねん

華嚴經の「心は工みなる画師のごとし」の文に天台の一念

さんぜん ほうもん ぬす い ひと えし けごんしゅう もん てんだい いちねん

三千の法門を偷み入れたり。人これをしらず。

にほん わ ちよう けごんとう ろくしゅう てんだい しんごんいぜん

日本、我が朝には、華嚴等の六宗、天台・真言已前に

けごん さんろん

ほっそう じょうろんすいか

でんぎょう
でんぎよう

わたりけり。華嚴・三論・法相、諍論水火なりけり。伝教

だいし くに 出 破

大師この国にいでて六宗の邪見をやぶるのみならず、

しんごんしゅう てんだい ほけきょう り ぬす と じしゅう ごく
真言宗が天台の法華經の理を盜み取つて自宗の極とする

顕

ことあらわれおわんぬ。

でんぎょうだいし しゅうじゅう にんし いしゅう 捨 もつぱ きょうもん

伝教大師、宗々の人師の異執をすてて、専ら經文を

さき

前として責めさせ給いしかば、六宗の高徳八人・十二人・

じゅうしにん

さんびやくよにん

こうぼうだいしどう 責

落

十四人・三百余人ならびに弘法大師等せめおとされて、

にほんこくいちにん

てんだいしゅう

きぶく

こうとくはちにん

じゅうにん

日本国一人もなく天台宗に帰伏し、南都・東寺・日本一州

さんじ

みな

えいざん

まつじ

かんど

しょしゅう

がんそ

の山寺、皆、叡山の末寺となりぬ。また漢土の諸宗の元祖

てんだい

きぶく

ほうぼう

とが

免

顕

の、天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたることもあらわれぬ。

のち

漸

よ

衰

ひと

ち

浅

てんだい

じんぎ

なら

失

たしゅう

しゅうしん

だいうじょう

どに、天台の深義は習いうしないぬ。他宗の執心は強盛に

漸

ろくしゅう

しちしゅう

てんだいしゅう

落

なるほどに、ようやく六宗・七宗に天台宗おとされて

故

けつく

ろくしゅう

しちしゅう

及

よわりゆくかのゆえに、結句は六宗・七宗等にもおよば

言

ぜんしゅう

じょうどしゅう

はじ

だんな

ずいうにかいなき禪宗・淨土宗におとされて、始めは檀那

漸

じやしゅう

移

けつく

てんだいしゅう

せきとく

あお

ようやくかの邪宗にうつる。結句は、天台宗の碩徳と仰が

ひとびと

皆

落

か

じやしゅう

助

るる人々、みなおちゆきて彼の邪宗をたすく。さるほどに、

ろくしゅう

はつしゅう

でんぱた

しょりよう

皆

倒

しゅうほうう

果

六宗・八宗の田畠・所領みなたおされ、正法失せはて

てんしょうだいじん しょうはちまん さんのうとう もろもろ しゅご しょだいぜんじん

ぬ。天照太神・正八幡・山王等、諸の守護の諸大善神も、

ほうみ 詧

法味をなめざるか、國中を去り給うかの故に、惡鬼便りを

え くに やぶ

得て國すでに破れなんとす。

よ ぐけん

さきしじゅうよねん

のちはちねん

そ う い

ここに、予、愚見をもつて前四十余年と後八年との相違を

勘

そ う い おお

かんがえみるに、その相違多しといえども、まず世間の学者

許

わ

み

打

覚

せ け ん

がくしゃ

もゆるし我が身にもさもやとうちおぼうることは、

にじょうさぶつ くおんじつじょう

二乘作仏・久遠実成なるべし。

ほけきょう

げんもん

はいけん

し ゃ り ほ つ

けこ う に ょ ら い

かしょ う

法華経の現文を拝見するに、舍利弗は華光如來、迦葉は

こうみょうによらい しゅばだい みょうそうによらい かせんねん えんぶなだいこんこうによらい
光明如來、須菩提は名相如來、迦旃延は闍浮那提金光如來、

もくれん たまらばつせんだんこうぶつ ふるな ほうみょうによらい

あなん

目連は多摩羅跋栴檀香仏、富樓那は法明如來、阿難は

せんがいえじざいつうおうぶつ らごら とうしつぼうけによらい

ごひやく しちひやく

山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七寶華如來、五百・七百は

ふみょうによらい がく むがくにせんにん ほうそうによらい

まかはじやはだい

普明如來、學・無學二千人は宝相如來、摩訶波闍波提

びくに やしゆだらびくにとう いつさいしゅじょうきげんによらい

ぐそく

比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は一切衆生喜見如來・具足

せんまんこうそうによらいとう

ひとびと

ほけきょう

はいけん

千万光相如來等なり。これらの人々は、法華經を拝見した

たつと

にぜん

きょうぎょう

ひけん

とき

てまつるには尊きようなれども、爾前の經々を披見の時

興醒 多

は、きようさむることどもおおし。

ゆえ ぶつせそん じつご ひと

ゆえ しょうにん だいにん

ごう

その故は、仏世尊は實語の人なり。故に聖人・大人と号

す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは、実語につけたる名なるべし。これらの人々に勝れて第一なる故に、世尊をば大人とは申すぞかし。この大人、「ただ一大事の因縁をもつての故に、世に出現したもう」となのらせ給いて、「いまだ真実を顯さず」「世尊は法久しくして後、要ず當に真実を説きたもうべし」「正直に方便を捨つ」等云々。多宝仏証明を加え、分身舌を出だす等は、舍利弗が未來のけこうによらい かしよう こうみようによらいとう せつ 華光如来、迦葉が光明如来等の説をば、誰の人か疑網をなすべき。

しかれども、爾前^{にぜん}の諸經^{しょきょう}もまた仏陀^{ぶつだ}の実語^{じつご}なり。

大方廣仏華嚴經に云わく「如來の智慧・大藥王樹はただ二処^{にしよ}に於いてのみ生長^{しようちよう}の利益をなすこと能わず。いわゆる

りやく
あた

においてのみ生長^{りやく}の利益をなすこと能わず。いわゆる

二乘^{にじょう}の無為^{むい}広大^{こうだい}の深坑^{じんきょう}に墮^おつると、および善根^{ぜんこん}を壞^{やぶ}る非器^{ひき}

の衆生^{しゆじょう}の大邪見^{だいじやけん}・貪愛^{とんあい}の水^{みず}に溺^{おぼ}るるとなり」等云々。この

經文^{きょうもん}の心^{こころ}は、雪山^{せつせん}に大樹^{だいじゆ}あり、無尽根^{むじんこん}となづく。これを

大藥王樹^{だいやくおうじゆ}と号す。閻浮提^{えんぶだい}の中^{なか}の大王^{だいおう}なり。この木^木の高

さは十六万八千由旬^{じゅうろくまんはつせんゆじゅん}なり。一閻浮提^{いちえんぶだい}の草木^{草木}は、この

木^木の根ざし・枝葉^{しだい}・花菓^{はなみ}の次第^{ねだい}に随^{したが}つて花菓^{はなみ}なるなるべし。

木^木の根ざし・枝葉^{はなみ}・花菓^{はなみ}の次第^{ねだい}に隨^{したが}つて花菓^{はなみ}なるなるべし。

き

ほとけ

ぶつしょう

たと

いつさいいしゅじょう

いつさい

この木をば仏の仮性に譬えたり。一切衆生をば一切の

そうもく

譬

草木にたとう。ただし、この大樹は火坑と水輪の中に生長

にじょう

しんちゅう

かきょう

なが

なが

なか

しょうちょう

せず。二乘の心中をば火坑にたとえ、一闡提人の心中を

すいりん

きょうもん

にるい

なが

ほとけ

ば水輪にたとえたり。この二類は永く仏になるべからずと

もう
きょうもん

申す経文なり。

だいじつきょう

い

にしゅ
ひとあ

かなら
し

い

大集経に云わく「二種の人有り、必ず死して活きず。

ひつきょう

おん

し

おん

ほう

あた

いち

しょうもん

に

畢竟して恩を知り恩を報ずること能わず。一には声聞、二

えんがく

たと

ひとあ

じんきょう

だつい

には縁覚なり。譬えば、人有つて深坑に墮墜するに、この

ひとみづか

り

た

り

あた

しょうもん

えんがく

人自ら利し他を利すること能わざるがごとし。声聞・縁覚

もまたかくの「ことし。解脱の坑に墮ちて、自ら利しおよび

げだつ あな お

みづか り

みづか

り

他を利すること能わず」等云々。

た
り
げてんさんぜんよかん
あた
しょせん
ふた

外典三千余巻の所詮に二つあり。いわゆる、孝と忠とな

こう ちゅう
こう いえ
出

こう
ちゅう
てんたか
こう
もう
こう
もう
こう
ち
厚

り。忠もまた孝の家よりいでたり。孝と申すは高なり。天高

こう
たか

けれども、孝よりも高からず。また孝とは厚なり。地あつけ

こう

あつ

せいけん

にるい

こう

いえ

出

ち

厚

れども、孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいでた

ぶっぽう

がく

ひと

ちおん

ほうおん

出

ち

厚

り。いかにいわんや、仏法を学せん人、知恩・報恩なかる

ぶつでし

かなら

しおん

ちおん

ほうおん

べしや。仏弟子は必ず四恩をしつて知恩・報恩をいたすべ

し。

その上、舍利弗・迦葉等の一乗は、一百五十戒・三千の威儀を持整して、味・淨・無漏の三靜慮、阿含經をきわめ、三界の見思を尽くせり。知恩・報恩の人の手本なるべし。しかるを、不知恩の人なりと世尊定め給いぬ。その故は、父母の家を出でて出家の身となるは、必ず父母をすぐわんがためなり。一乗は、自身は解脱とおもえども、利他の行かけぬ。たとい分々の利他ありといえども、父母等を永不成仏の道に入るれば、かえりて不知恩の者となる。

維摩經に云わく「維摩詰、また文殊師利に問う。何らを

か如來の種となす。答えて曰わく○一切の塵勞の疇は
如來の種となる。五無間をもつて具すといえども、なお能く
この大道意を發す』等云々。また云わく「譬えば、族姓の
子よ、高原陸土には青蓮・芙蓉・衡華を生ぜず、卑湿汚田
には乃ちこの華を生ずるがごとし」等云々。また云わく
「すでに阿羅漢を得て應真となる者は、終にまた道意を起
こして仏法を具すること能わざるなり。根敗の士は、それ
五樂においてまた利すること能わざるがごとし」等云々。文
の心は、貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし、父を殺

とう　　だりぎやくざい　　ぶつしゅ
こうげんりくど　　しょうれんげしょう
す等の五逆罪は仏種となるべし、高原陸土には青蓮華生ず
べし、二乗は仏になるべからず。

にじょう　　ほとけ　　成
こころ　　にじょう　　しょせん　　ぼんふ　　あく　　あいたい
いう心は、二乗の諸善と凡夫の悪と相対するに、凡夫の
悪は仏になるとも二乗の善は仏にならじとなり。諸の
しようじようきよう

あく　　ほとけ
成
小乗経には、悪をいましめ、善をほむ。この経には、二乗
ぜん　　褒
の善をそしり、凡夫の悪をほめたり。かえつて仏経とも
覚　　げどう　　ぼんふ　　あく

おぼえず、外道の法門のようなれども、詮ずるところは二乗
ようふじようぶつ　　強　　さだ
の永不成仏をつよく定めさせ給うにや。

ほうどうだらにきよう　　い
もんじゅ　　しゃりほつ　　かた
方等陀羅尼經に云わく「文殊、舍利弗に語らく『なお枯樹

こじゆ

はな しょう

いな

さんすい

のごときは、さらに花を生ずるや不や。また山水のごとき

もと ところ かえ
いな

せつしやくかえ
あ

いな

しょうしゅ

は、本の処に還るや不や。折石還つて合うや不や。燋種

め しよう
いな

しゃりほつい
いな

もんじゅい

不なり。舍利弗言わく『不なり』。文殊言わく

芽を生ずるや不や』。舍利弗言わく『不なり』。文殊言わく

われ

ぼだい

き

う

『もし得べからずんば、いかんぞ我に菩提の記を得ること

と かんき しよう

とううんぬん

もん

こころ

か

を問うて歡喜を生ずるや』と等云々。文の心は、枯れ

きはな咲

還

わ

いし合

燋

たる木花さかず、山水山にかえらず、破れたる石あわづ、い

しゆ 生

にじょう

ぶつしゅ

燐

とう

れる種おいづ。一乗またかくのごとし。仏種をいれり等と

なん。

だいぼんはんにやきよう

い

もうもう

てんし

いま

さんぼだいしん

大品般若經に云わく「諸の天子よ。今いまだ三菩提心

おこ もの まさ おこ
しょうもん しょうい い
を発さざる者は応當に発すべし。もし声聞の正位に入らば、
この人は三菩提心を発すこと能わざるなり。何をもつての
故に。生死のために障隔を作すが故なり」等云々。文の心
は、二乗は菩提心をおこさざれば、我隨喜せじ。諸天は
菩提心をおこせば、我隨喜せん。
首楞嚴經に云わく「五逆罪の人、この首楞嚴三昧を聞
いて阿耨菩提心を發せば、還つて仏と作ることを得。世尊
よ。漏尽の阿羅漢はなお破器のごとく、永くこの三昧を受く
るに堪忍せず」等云々。

じょうみょうきょう

い

なんじ ほどこ

ふくでん

な

淨名經に云わく「それ汝に施さば、福田と名づけず。

なんじ くよう さんあくどう お とううんぬん もん こころ かしよう

汝を供養せば、三惡道に墮つ」等云々。文の心は、迦葉。

しゃりほつとう しょうそう くよう にんてんとう かなら さんあくどう お

舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三惡道に墮つべ

しとなり。

しようそう

ぶつだ

のぞ

にんてん

これら聖僧は、仏陀を除きたまつりては人天の

がんもく

いつきいしゅじょう

どうし

思

幾

にんてん

眼目・一切衆生の導師とこそおもいしに、いくばくの人天

だいえ なか

たびたびおお

ほい 無

にんてん

大会の中にして、こう度々仰せられしは本意なかりしこと

せん

わ

みでし

せ

殺

むりよう

なり。ただ詮ずるところは我が御弟子を責めころさんとに

ほか

ごろ

にゆう

がき

こんき

ほたるび

につけとう

むりよう

や。この外、牛驢の一乳、瓦器・金器、螢火・日光等の無量

たと

にじょう

かしやく

たま

いちごんにごん

の譬えをとつて二乗を呵責せさせ給いき。一言二言ならず、
いちにちににち
一日一日ならず、一月二月ならず、一年一年ならず、一経
にきよう

ひとつきふたつき
いちねんにねん
二経ならず、四十余年が間、無量無辺の経々に、無量の

ひじゅうよねん
あいだ
むりょうむへん
きょうぎょう
むりょう

大会の諸人に對して一言もゆるし給うこともなくそしり給

だいえ
しょにん
たい
いちごん
許
たも

いしかば、世尊の不妄語なり。我もしる、人もしる、天も

ふもうご
われ
知
ひと

しる、地もしる。一人二人ならず百千万人、三界の諸天・

いちにんにん
ひやくせんまんにん
さんがい
しょてん

竜神・阿修羅、五天・四洲、六欲・色・無色、十方世界よ

りゆうじん
あしゅら
ごてん
しじゅう
ろくよく
しき
むしき
じっぽうせかい

うんじゅう
にんてん
にじょう
だいぼきつとう
みな

り雲集せる人天・二乘・大菩薩等、皆これをしる、また皆

みな

これをきく。各々国々へ還つて、娑婆世界の釈尊の説法を

聞

おのおくにぐに

かえ

しゃばせかい

しゃくそん

せっぽう

かれがれ

くにぐに

いちいち

語

じっぽう
むへん

せかい

彼らの國々にして一々にかたるに、十方無邊の世界の
いっさいしゅじょういちにん
かしよう しゃりほつとう ようふじょうぶつ もの くよう
一切衆生一人もなく、迦葉・舍利弗等は永不成仏の者、供養
してはあしかりぬべしとしりぬ。

悪

知

かかるを、後八年の法華經にたちまちに悔い還して、二乗
さぶつ
のちはちねん
ほけきょう
かえ
にじょう
さぶつ
もち
ぶつだ 説
たま
にんてんだいえ
しんこう
作仏すべしと仏陀とかせ給わんに、人天大会、信仰をなす
べしや。用いるべからざる上、先後の經々に疑網をなし、

五十余年の説教、皆虛妄の説となりなん。

されば、

せつきょう

みなこもう

せつ

うえ

せんご

きょうぎょう

ぎもう

「四十余年にはいまだ真実を顯さず」等の經文はあらま

しじゅうよねん

あらわ

あらわ

とう

きょうもん

きょう

させか、「天魔の仏陀と現じて、後八年の經をばとかせ給う

てんま

ぶつだ

げん

のちはちねん

きょう

説

たも

ぎもう

実

こう

こく

みょうじう

か」と疑網するところに、げにげにしげに劫・国・名号と
申して二乗成仏の國をさだめ、劫をしるし、所化の弟子な
んどを定めさせ給えば、教主釈尊の御語すでに二言にな
りぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者
と咲いしことこれなり。

にんてんだいえ

興

醒

とき

とうほうほうじよう

人天大会きようさめてありしほどに、その時に東方宝淨
世界の多宝如来、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の
大七宝塔に乗じて、教主釈尊の、人天大会に自語相違を

せめられて、とのべ、こうのべ、さまざまに宣べさせ給い
責

宣

宣

の

たま

ふしん

晴

み

持

扱

しかども、不審なおはるべしとも見えず、もてあつかいて

とき ぶつぜん だいち ゆげん

こくう 上 たも

れい

おわせし時、仏前に大地より涌現して虚空にのぼり給う。例

あんや まんげつ とうざん

い

しつぽう とう

せば、暗夜に満月の東山より出づるがごとし。七宝の塔、

おおぞら

懸

たま

だいち

付

おおぞら

つ

大虚にかからせ給いて、大地にもつかず、大虚にも付かせ給

てんちゅう か

のたま

か

ほうとう うち

ほんのんじょう い

い

わづ、天中に懸かつて、宝塔の中より梵音声を出だして

ほうとう うち

のたま

か

とき ほうとう なか

だいおんじょう い

い

証明して云わく「その時、宝塔の中より大音声を出だ

ほ ほ

のたま

よ

よ

よ

よ

い

して、歎めて言わく『善きかな、善きかな。釈迦牟尼世尊

よ びょうどうだいえ ぼさつ おし

ほ ほ

よ

ほ

ほ

ほとけ ごねん

い

は、能く平等大慧、菩薩を教うる法にして、仏の護念した

みようほけきよう

だいしゅ

と

もうところの妙法華經をもつて、大衆のために説きたもう。

かくのごとし、かくのごとし。釈迦牟尼世尊の説きたもう

みな しやかむにせそん と とううんぬん

ところのごときは、皆これ真実なり』と』等云々。また云わ

い とき せそん もんじゅしりとう むりょうひやくせんまんおく もと

く「その時、世尊は、文殊師利等、無量百千万億の旧より
娑婆世界に住せる菩薩乃至人・非人等、一切の衆の前にお

だいじんりき げん こうちようぜつ い かみぼんせ

いて、大神力を現じたもう。広長舌を出だして、上梵世に

いた いっさい もうく ないしじっぽう せかい もろもろ ほうじゅ

至らしめ、一切の毛孔より乃至十方の世界の衆の宝樹の

もと ししざ うえ しょぶつ こうちようぜつ い じっぽう

下、師子座の上の諸仏もまたかくのごとく、広長舌を出だ

むりょう ひかり はな とううんぬん い じっぽう

し、無量の光を放ちたもう』等云々。また云わく「十方よ

きた もるもろ ふんじん ほとけ おののおほんどう かえ

り来りたまえる諸の分身の仏をして、各本土に還らし

めんとして乃至多宝仏の塔は、還つて故のことくしたもう
べし」等云々。
ないしたほうぶつ とう かえ もと とううんぬん

大覺世尊初成道の時、諸仏十方に現じて釈尊を慰諭し
給う上、諸の大菩薩を遣わしき。般若経の御時は、釈尊
長舌を三千におおい、千仏十方に現じ給う。金光明経に
は四方の四仏現ぜり。阿弥陀経には六方の諸仏、舌を三千に
おおう。大集経には十方の諸の仏菩薩、大宝坊にあつま
れり。

だいかくせそんしょじょうどう とき しょぶつじっぽう げん しゃくそん いゆ
たも うえ もろもろ だいぼさつ つか はんにやきよう おんとき しゃくそん
しほう しぶつげん 覆 せんぶつじっぽう げん たま こんこうみようきよう
しほう しぶつげん あみだきよう ろくまん しょぶつ した さんぜん
だいじっきよう じっぽう もろもろ ぶつぼさつ だいほうぼう 集

これらを法華経に引き合わせてかんがうるに、黄石と
ほけきよう ひ あ 勘 こうせき

おうごん

はくうん はくざん はくひよう ごんきよう こくしょく せいしょく

黄金と、白雲と白山と、白氷と銀鏡と、黒色と青色と

えいげん もの びょうもく もの いちげん もの じやげん もの み 違

をば、翳眼の者、眇目の者、一眼の者、邪眼の者は見たが

えつべし。

けごんきょう

せんご

きょう

ぶつごそうい

華嚴經には、先後の經なれば仏語相違なし。なににつ

たいぎ 出 く

たいじっきよう だいほんきよう

こんこうみょううきよう

けてか大疑いで來べき。大集經・大品經・金光明經・

あみだきょうとう

じょううど だんか

じっぽう

阿弥陀經等は、諸小乘經の二乗を彈呵せんがために十方

じょううど 説

ぼんふ

ぼさつ

にじょう ごんも

にじょう

煩

じっぽう

に淨土をとき、凡夫・菩薩を欣慕せしめ、二乗をわづらわ

じょうじょうきょう しょだいじょうきょう

いちぶん

そういう

す。小乘經と諸大乘經と一分の相違あるゆえに、ある

じっぽう

ほとけげん

たま

じっぽう

だいぼさつ

遣

いは十方に仏現じ給い、あるいは十方より大菩薩をつかわ

じつぱうせかい

きよう

説

由

示

し、あるいは十方世界にもこの經をとくよしをしめし、あるいは十方より諸仏あつまり給う。あるいは釈尊舌を三千覆

じつぱう
しょぶつ

たも

しゃくそんした
さんぜん

たま

しょぶつ した 出

由 説

たま

におおい、あるいは諸仏の舌をいだすよしをとかせ給う。

しょしようじょうきょう

じつぱうせかい

いちぶつ

あ

これひとえに、諸小乗經の「十方世界にただ一仏のみ有

説 たま 思

破

ほけきょう

り」ととかせ給いしおもいをやぶるなるべし。法華經のご

せんご しょだいじょうきょう そういうしゅつたい

しゃりほつとう もろもろ

とくに先後の諸大乗經と相違出来して、舍利弗等の諸

しょうもん

だいぼさつ

にんてんとう

ま

ほとけ

な

の声聞・大菩薩・人天等に「はた、魔の仏と作るにあら

思 たも だいじ

ずや」とおもわれさせ給う大事にはあらず。

けごん ほつそう さんろん しんごん ねんぶつとう えいげん やから

しかるを、華嚴・法相・三論・真言・念佛等の翳眼の輩、

かれがれ

きょうぎょう

ほけきょう

おな

打

思

拙

彼々の經々と法華經とは同じどうちおもえるは、つたな
き眼なるべし。

ただし、在世は四十余年をすてて法華經につき候もの
もやありけん。仏の滅後にこの經文を開見して信受せん
ことかたかるべし。

まず一には、爾前の經々は多言なり、法華經は一言な
り。爾前の經々は多經なり、この經は一經なり。彼々の
經々は多年なり、この經は八年なり。仏は大妄語の人、
永く信ずべからず。不信の上に信を立てば、爾前の經々は
なが
しん
ふしん
うえ
しん
た
にぜん
きょうぎょう

しん

ほけきょう

なが

しん

とうせい

信することもありなん。法華経は永く信ずべからず。当世も、
法華経をば皆信じたるようなれども、法華経にてはなきな
ほけきょう みなしな

り。その故は、法華経と大日経と、法華経と華厳経と、

ほけきょう ゆえ ほけきょう だいにちきょう ほけきょう けごんきょう

法華経と阿弥陀経と一なるようをとく人をば悦んで帰依

ほけきょう ひとつ ほけきょう ひとつ ほけきょう ひとつ ほけきょう よろこ ほけきょう ひと

法華経と阿弥陀経と一なるようをとく人をば悦んで帰依

ほけきょう ひとつ ほけきょう ひとつ ほけきょう ひとつ ほけきょう よろこ ほけきょう ひと

し、別々なるなんど申す人をば用いづ。たとい用いれども、

ほい 無

本意なきこととおもえり。

にちれんい

にほん ぶっぽう

ななひやくよねん

日蓮云わく「日本に仏法わたりてすでに七百余年、ただ

でんぎょうだいしげん

ほけきょう 読

もう

もう

伝教大師一人ばかり法華経をよめり」と申すをば、諸人こ

もち

ほけきょう い

い

れを用いづ。ただし、法華経に云わく「もし須弥を接つて、

他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさ
ず乃至もし仏滅して後、惡世の中において、能くこの経を
説かば、これは則ち難しとなす」等云々。日蓮が強義、經文
には符合せり。法華經の流通たる涅槃經に「末代濁世に謗法
の者は十方の地のごとし、正法の者は爪上の土のごとし」
ととかれて候は、いかんがし候べき。日本の諸人は
爪上の土か、日蓮は十方の土か、よくよく思惟あるべし。
賢王の世には道理かつべし、愚主の世に非道先をすべし、
聖人の世に法華經の実義顯るべし等と心うべし。

この法門は、迹門と爾前と相対して爾前の強きようおぼ
ゆ。もし爾前つよるならば、舍利弗等の諸の二乗は
永不成仏の者なるべし。いかんがなげかせ給うらん。
二には、教主釈尊は、住劫第九の減・人寿百歳の時、
師子頬王には孫、淨飯王には嫡子、童子悉達太子、一切
義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、
始め寂滅道場にして実報華王の儀式を示現して、十玄・
六相・法界円融・頓極微妙の大法を説き給い、十方の諸仏も
顯現し、一切の菩薩も雲集せり。土といい、機といい、諸仏

はじ

なにごと

だいほう

ひ

たも

といい、始めといい、何事につけてか大法を秘し給うべき。

きょうもん

じぎいりき

けんげん

えんまん

きょう

えんぜつ

されば、経文には「自在力を顯現し、円満なる経を演説す」

とううんぬん いちぶろくじっかん いちじいってん

えんまん

きょう

たど

等云々。一部六十巻は一字一点もなく円満なる経なり。譬

によいほうしゅ

いつしゅ むりょうしゅ

とも

おな

いつしゅ

まんぱう

つ

えば、如意宝珠は一珠も無量珠も共に同じ、一珠も万宝を尽

まんしゅ

まんぱう

つ

けごんきょう いちじ

しうじょう

くして雨らし、万珠も万宝を尽くすがごとし。華厳経は一字

まんじ

おな

こと

ここる

ほとけ

しゅじょう

も万字もただ同じき事なるべし。「心、仏および衆生」

もん

けごんしゅう

かんじん

ほつそう

さんろん

しんごん

の文は、華嚴宗の肝心なるのみならず、法相・三論・真言・

てんだい

かんよう

もう

そうちら

天台の肝要とこそ申し候え。

ほど

なにごと

かく

これら程いみじき御経に何事をか隠すべきなれども、

おんきょう

なにごと

にじょう

せんだい

じょうぶつ

説

たま

瑕

見

「二乗と闡提とは成仏せず」ととかれしは珠のきずとみゆ
る上、三処まで「始めて正覚を成す」となのらせ給いて、
久遠実成の寿量品を説きかくさせ給いき。珠の破れると、
月に雲のかかれると、日の蝕したるがごとし。不思議なり
しことなり。

あごん

ほうどう

はんにや

だいにちきようとう

ぶっせつ

あごん

ほうどう

はんにや

だいにちきようとう

ぶっせつ

甲斐

かきょう

かきょう

阿含・方等・般若・大日經等は、仏説なればいみじきこ
となれども、華嚴經にたいすればいにかになし。彼の經

ひ

きょううぎょう

説

言

對

だい

に

に秘せんこと、これらの經々にとかるべからず。されば、

もうもろ

あごんきょう

い

はじ

じょうじう

とううんぬん

だいじつきよう

諸の阿含經に云わく「始めて成道す」等云々。大集經に

い
によらいじょうどう

はじ
じゅうろくねん
とううんぬん

とううんぬん

云わく「如來成道してより始めて十六年なり」等云々。
い
はじ
ぶつじゅ
さ
つと
ま
くだ
とううんぬん

淨名経に云わく「始め仏樹に坐して、力めて魔を降す」
とううんぬん
だいにちきよう
い
われ
むかしどうじょう
ざ
とううんぬん
にじゅうくねん
とううんぬん
とううんぬん
等云々。大日経に云わく「我は昔道場に坐す」等云々。
はんにや
にんのうきよう
い
われ
むかしどうじょう
ざ
とううんぬん
とううんぬん
とううんぬん

般若・仁王経に云わく「二十九年」等云々。

い
足
じもく
驚

これらは言うにたらず。ただ耳目をおどろかすことは、
むりようぎきよう
けじんきよう
ゆいしんほつかい
ほうどう
はんにやきよう
かいいんざんまい
無量義経に華嚴経の唯心法界、方等・般若経の海印三昧・
こんどうむにとう
だいほう
混同無二等の大法をかきあげて、あるいは「いまだ真実を
あらわ

顕さず」、あるいは「歴劫修行」等と下す程の御経に、
りやつこうしゅぎよう
とう
くだ
ほど
おんきよう
しんじつ

「私は先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、
われ
さき
どうじょうぱだいじゅ
もと
たんざ
ろくねん

あのくたらさんみやくさんばだい じょう
阿耨多羅三藐三菩提を成ざることを得たり」と、初成道の
けんきょう しじょう もん どう
華嚴經の始成の文に同ぜられし、不思議と打ち思うところ
ほけきょう じよぶん
に、これは法華經の序分なれば、正宗のことをいわづも
あるべし。法華經の正宗、略開三・廣開三の御時、「た
ほとけ ほとけ
だ仏と仏とのみ、いまし能く諸法の実相を究尽したまえ
とう せそん ほうひさ
り」等、「世尊は法久しくして後」等、「正直に方便を捨つ」
とう たほうぶつ しゃくもんはっぽん さ
等、多宝仏、迹門八品を指して「皆これ真実なり」と証明
なにごと かく
せられしに、何事をか隠すべきなれども、久遠寿量をば秘せ
くおんじゅりよう ひ
させ給いて、「我は始め道場に坐し、樹を観じまた経行す」
たま われ はじ どうじょう さ
じゆ かん
きょうぎょう

とううんぬん さいだいいち だいふしき
等云々。最第一の大不思議なり。

されば、弥勒菩薩、涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩
を仏「しかして乃ちこれを教化して、初めて道心を発さ
しむ」等ととかせ給いしを、疑つて云わく「如來は太子た
りし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、
道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得た
まえり。これより已来、始めて四十余年を過ぎたり。世尊よ。
いかんぞこの少時において、大いに仏事を作したまえる」等
云々。

きょうしゅしゃくそん

うたが

は

じゅりょうほん

教主釈尊、これらの疑いを晴らさんがために寿量品

説

にぜん

しゃくもん

聞

あ

のたま

をとかんとして、爾前・迹門のききを挙げて云わく

いっさいせけん

てん
にん

あしゅら

みな
いま

しゃかむにぶつ

「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は

しゃくし

みや

い

がやじよう

さ

とお

どうじよう

ざ

釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐

あのくたらさんみやくさんばだい

え

おも

とううんぬん

して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云々。

まさ

正しくこの疑いを答えて云わく「しかるに、善男子よ、我

じつ
じょうぶつ

このかた

むりょうむへんひやくせんまんおくなゆたこう

い

ぜんなんし

われ

は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫な

とううんぬん

り」等云々。

けごんないしほんにや

だいにちきょうとう

にじょうさぶつ

かく

華嚴乃至般若、大日經等は、二乗作仏を隠すのみならず、

くおんじつじょう

と

隠

たま

久遠実成を説きかくさせ給えり。

きょうぎょう

ふた

とが

いち

ぎょうふ

そん

これらの経々に二つの失あり。一には、「行布を存する

が故に、なおまだ權を開せず」とて、迹門の一念三千を

かくせり。二には、「始成を言うが故に、かつて今まで迹を

発かず」とて、本門の久遠をかくせり。これらの一つの大法

は、一代の綱骨、一切経の心髓なり。

ひら

ほんもん

くおん

隠

ゆえ

しゃく

ふた

だいほう

しやく

は、一念三千・二乗作仏を説いて、爾前二種の

しゃくもんほうべんぽん

いちねんさんぜん

にじょうさぶつ

と

にぜんにしゅ

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を脱れたり。しかりといえども、いまだ發迹顕本せ

とがひと

のが

ほつしゃくけんぽん

さだ

ざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定ま

いちねんさんぜん

顕

にじょうさぶつ

さだ

らず、水中の月を見るがごとし。根なし草の波の上に浮かべるににたり。

似

本門にいたりて始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる。
四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前・迹門の十界の因果を打ちやぶつて、本門の十界の因果をとき顯す。これ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備わつて、眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

顧

こうてかえりみれば、華嚴經の台上十方、阿含經の

しようしゃか ほうどう はんにや こんこうみようきょう あみだきょう だいにちきょう
小釈迦、方等・般若の、金光明經の、阿弥陀經の、大日經
とう ごんぶつとう じゅりょう ほとけ かげ だいしょう
等の權仏等は、この寿量の仏の天月しばらく影を大小の
うつわ う たも しょしゅう がくしやとう ちか じしゅう まよ
器にして浮かべ給うを、諸宗の学者等、近くは自宗に迷い、
とお ほけきょう じゅりょうほん すいちゅう つき じつげつ おも
遠くは法華經の寿量品をしらず、水中の月に実月の想い
と い 思 なわ 付
をなし、あるいは入つて取らんとおもい、あるいは縄をつけ
げつ 繫 てんたい てんげつ し
てつなぎどどめんとす。天台云わく「天月を識らず、ただ池
月のみを観ず」等云々。

にちれんあん い にじょうさぶつ にぜん 強 覚
日蓮案じて云わく、二乗作仏すらなお爾前づよにおぼゆ。
くおんじつじょう 似 にぜん にぜん ゆえ

久遠実成はまたにるべくもなき爾前づりなり。その故は、

にぜん ほつけあいたい

にぜん 強 うえ

にぜん

爾前・法華相対するに、なお爾前こわき上、爾前のみなら

しゃくもんじゅうしほん

いつこう

にぜん どう

ほんもんじゅうしほん

ゆじゅつ

ず迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・

じゅりょう

にほん

のぞ

みなじょう

そん

そうりん さいご

寿量の一品を除いては皆始成を存せり。双林最後の

だいはつねはんきょうしじっかん

ほか

ほつけぜんご

しょだいじょうきょう

いちじ

大般涅槃經四十卷、その外の法華前後の諸大乗經に一字

いっく

ほっしん

むしむしゅう

説

おうじん

ほうしん

けんぽん

一句もなく法身の無始無終はとけども応身・報身の顯本は

とかれず。いかんが、

にぜん

ほんじやく

ねはんとう

廣博の爾前・本迹・涅槃等の

こうはく

にぜん

ほんじやく

にほん

つ

諸大乗經をばすてて、ただ涌出・寿量の一品には付くべき。

されば、法相宗と申す宗は、

西天に仏の滅後九百年

ほつそうしゅう

もう

しゅう

さいでん

ほとけ

めつごきゅうひやくねん

むじやくぼさつ もう だいろんじましま よる とそつ ないでん

に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、

弥勒菩薩に対面して一代聖教の不審をひらき、昼は

阿輸舍国にして法相の法門を弘め給う。彼の御弟子は

世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王頭をかた

ぶけ、五天幢を倒してこれに帰依す。尸那國の玄奘三藏、

月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国々を見ききて

諸宗をばふりすて、この宗を漢土にわたして太宗皇帝と

申す賢王にさずけ給い、昉・尚・光・基を弟子として

大慈恩寺ならびに三百六十余箇国に弘め給う。日本国には

にんのうさんじゅうしちだいこうとくてんのう

ぎょう

どうじ

どうしょうとう

習

渡

人王三十七代孝徳天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわた

やましなでら

崇 たま

さんじくだいいち

しゅう

して山階寺にあがめ給えり。三国第一の宗なるべし。

しゅうい

はじ けごんきょう

お

ほつけ

ねはんぎょう

むしょううじょう

けつじょうしよう

にじょう

なが

ほとけ

成

たるまで、無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべか

ぶつご

にごん

ひとたびようふじょうぶつ

さだ

たま

うえ

らず。仏語に二言なし。一度永不成仏と定め給いぬる上は、

にちがつ ち お たも

だいち

はんぶく

なが

へんがいあ

日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く変改有る

ほけきょう

ねはんぎょう

なか

にぜん

きょうぶつ

べからず。されば、法華經・涅槃經の中にも爾前の經々に

きら

むしょううじょう

けつじょうしよう

まさ

突

指

じょうぶつ

嫌いし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとは

説

まなこ

と

あん

ほけきょう

ねはんぎょう

とかれず。まず眼を閉じて案ぜよ。法華經・涅槃經に、

けつじょうじょう 決定性・無性有情、むしよううじょう ただ ほとけ
正しく仏になるならば、無著・世親 せしん
ほどの大論師、玄奘・慈恩ほどの三藏・人師、これをみざ
るべしや、これをのせざるべしや、これを信じて伝えざる
べしや、弥勒菩薩に聞いたてまづらざるべしや。汝は みろくぼさつ
法華経の文に依るようなれども、天台・妙楽・伝教の僻見 ほけきよう もん よ
を信受して、その見をもつて経文を見るゆえに、爾前に しんじゅ けん
法華経は水火なりと見るなり」。

けごんしゅう 華嚴宗と真言宗は、法相・三論にはにあるべくもなき超過 しゅう ほつそう さんろん
の宗なり。「二乗作仏・久遠実成は法華経に限らず、 ちようか
ほけきよう かぎ

華厳經・大日經に分明なり。華嚴宗の杜順・智儼・法藏・
澄觀、真言宗の善無畏・金剛智・不空等は、天台・伝教に
似て、
はにるべくもなき高位の人なり。その上、善無畏等は
だいにちによらい
大日如來より糸みだれざる相承あり。これらの権化の人、
あやま
いかでか誤りあるべき。したがつて、華嚴經には『あるいは
は釈迦、仏道を成じてすでに不可思議劫を経と見る』等
云々。大日經には『私は一切の本初なり』等云々。何ぞ、
とう
たど
ただ久遠実成、寿量品に限らん。譬えば、井底の蝦が大海
を見ず、山左が洛中をしらざるがごとし。汝、ただ寿量

の 一 品 を 見 て 、 華 巖 ・ 大 日 経 等 の 諸 経 を しらざるか。そ
くおんじつじょう ほけきょう かぎ
の 上 、 月 氏 ・ 戸 那 ・ 新 羅 ・ 百 濟 等 に も 一 同 に 二 乘 作 仏 。

久 遠 実 成 は 法 華 経 に 限 る と い う か 」。

さ れ ば 、 八 箇 年 の 経 は 四 十 余 年 の 経 々 に は 相 違 せ り と
い う と も 、 先 判 ・ 後 判 の 中 に は 後 判 に つ く べ し と い う と も 、

な お 爾 前 づ り に こ そ お ぼ う れ 。 ま た 、 た だ 在 世 ば か り な ら
ば さ も あ る べ き に 、 滅 後 に 居 せ る 論 師 ・ 人 師 、 多 く は 爾 前 づ

り に こ そ 候 え 。

こ う 法 華 経 は 信 じ が た き 上 、 世 も よ う や く 末 に な れ ば 、

聖賢はようやくかくれ、迷者はようやく多し。世間の浅きことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや、出世の深法誤りなかるべしや。犢子・方広が聰敏なりし、なお大小乗経にあやまてり。無垢・摩訥が利根なりし、權実にきよう わきま 二教を弁えず。正法一千年の内、在世も近く月氏の内なりし、すでにかくのことし。いわんや、尸那・日本等は、国もへだて、音もかわれり。人の根も鈍なり。寿命も日あさし。貪・瞋・癡も倍増せり。仏世を去つてとし久しう。仏経みがあやまれり。誰の智解か直かるべき。

誤

たれ

ちげ

なお

隔

おと

変

ひと

こん

どん

じゅみょう

ひ

しょうけん

漸

隠

めいしゃ

漸

おお

せけん

あさ

誤

易

しゆつせ

聖賢はようやくかくれ、迷者はようやく多し。世間の浅きことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや、出世の

深法誤りなかるべしや。犢子・方広が聰敏なりし、なお

大小乗経にあやまてり。無垢・摩訥が利根なりし、權実

にきよう わきま

むく

まとうりこん

ごんじつ

二教を弁えず。正法一千年の内、在世も近く月氏の内な

うち

ほうこう そうびん

ちかがつし

うち

ことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや、出世の

深法誤りなかるべしや。犢子・方広が聰敏なりし、なお

とくし

ほうこう そうびん

りこん

うち

うち

ことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや、出世の

深法誤りなかるべしや。犢子・方広が聰敏なりし、なお

とくし

ほうこう そうびん

りこん

うち

うち

ほとけねはんぎょう

しる

のたま

まつぼう

しょうほう

もの

そうじょう

仏涅槃經に記して云わく「末法には正法の者は爪上

の土、謗法の者は十方の土」と見えぬ。法滅尽經に云わく

「謗法の者は恒河沙、正法の者は一・二の小石」と記しあ

き給う。千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたか

らん。世間の罪によつて悪道に墮つる者は爪上の土、仏法に

よつて悪道に墮つる者は十方の土。俗より僧、女より尼、多

く悪道に墮つべし。

ここに日蓮案じて云わく、世すでに末代に入つて
二百余年、辺土に生をうく。その上下賤、その上貧道の身

にひやくよねん
へんじ
しよう
受
うえげせん
うえひんどう
み

りんねろくしゅ あいだ にんてん だいおう う
ぱんみん 麻

なり。輪廻六趣の間、人天の大王と生まれて万民をなびか
すこと、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にな
らす。大小乗経の外凡・内凡の大菩薩と修しあがり、一劫
にこうむりようこう だいしようじょうきょう げほん ないほん だいぼさつ しゆ 上 いつこう
二劫無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべ
とき
かりし時も、強盛の惡縁におとされて仏にもならず。しら
ほとけ
ず、大通結縁の第三類の在世をもれたるか、久遠五百の退転
いま きた
して今に来れるか。法華経を行ぜしほどに、世間の惡縁・
おうなん げどう なん しようと なん せけん あくえん しの
王難・外道の難・小乗経の難などは忍びしほどに、
ごんだいじょう じつだいじょうきょう きわ どうしゃく せんどう ほうねん
権大乗・実大乗経を極めたるようなる道綽・善導・法然

とう

あくま

み
い

もの

ほけきょう

強

褒

等がごとくなる悪魔の身に入りたる者、法華経をつよくほめあげ機をあなたがちに下し、「理は深く解は微かなり」と立て、「いまだ一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」等

賺

者

むりようしよう

あいだ

ごうがしゃ

たび

とう

とすかししものに、無量生が間、恒河沙の度すかされて

ごんきょう

お

ごんきょう

しょうじょうきょう

お

げどう

た

権経に墮ちぬ。権経より小乗経に墮ちぬ。外道・外典

お

あくどう

お

ふか

知

た

に墮ちぬ。結句は惡道に墮ちけりと、深くこれをして

にほんこく

知

もの

にちれんいちん

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。

いちごん

もう

い

ふ

ぼ

きょうだい

しそう

こくしゅ

知

た

これを一言も申し出だすならば、父母・兄弟・師匠に國主

おうなんかなら

きた

じ

ひ

しゆい

の王難必ず来るべし、いわば慈悲なきににたりと思惟す

るに、法華經・涅槃經等にこの二辺を合わせ見るに、いわ
ずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし、
いうならば三障四魔必ず競い起くるべしとしんぬ。二辺の
中にはいうべし。王難等出来の時は退転すべくば一度に思
い止まるべしと、しばらくやすらいしほどに、宝塔品の
六難九易これなり。我ら程の小力の者、須弥山はなぐとも、
我ら程の無通の者、乾ける草を負つて劫火にはやけずとも、
我ら程の無智の者、恒沙の經々をばよみおぼうとも、
法華經は一句一偈も末代に持ちがたしととかるるは、これ

このたびごうじょう

ばだいしん

発

たいてん

がん

なるべし。今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願じぬ。

すでにじゅうよねん あいだ ほうもん もう ひび つきづき ねんねん

既に二十余年が間 この法門を申すに、日々・月々・年々に

難かさなる。少々の難はかずしらず、大事の難四度なり。

なん 重 しょうしよう なん 知 数 だいじ なんしど

二度はしばらくおく。王難すでに二度におよぶ。今度はすでに

おうなん に ど 及 うえ でし

に我が身命に及ぶ。その上、弟子といい、檀那といい、わ

わ しんみよう およ ちようもん ぞくじん きた じゅうか おこな だんな

の者のことし。

ほけきょう だいし い

法華経の第四に云わく「しかもこの経は、如來の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」等云々。

きょう によらい げん いま めつど のち とううんぬん

おんしつおお

だいに い きょう どくじゅ しょじ もの み
第二に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、
きょうせんぞうしつ けつこん いだ とううんぬん だいご い いつさい
軽賤憎嫉して、結恨を懷かん」等々。第五に云わく「一切
せけん あだおお しん がた とううんぬん い もろもろ
世間に怨多くして信じ難し」等々。また云わく「諸の
むち ひと あつく めりとう あ
無智の人の、悪口・罵詈等するもの有らん」。また云わく
こくおう だいじん ばらもん こじ む ひぼう わ あく
「国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて、誹謗して我が悪を
と じやけん ひと い い
説いて『これ邪見の人』と謂わん。また云わく「しばしば
ひんすい とううんぬん ねはんきょう い じょうもく がしゃく
擯出せられん」等々。また云わく「杖木・瓦石もて、こ
ちようちやく とううんぬん ねはんきょう い
れを打擲せん」等々。涅槃經に云わく「その時、多く無量
げどうあ わごう とも まかだこく おう あじやせ もと ゆ
の外道有つて、和合して共に摩訶陀國の王・阿闍世の所に往

きぬ○『今、ただ一りの大悪人有り、瞿曇沙門なり○一切の
世間の悪人は、利養のための故に、その所に往き集まつて
眷属となり、善を修すること能わず。呪術の力の故に、
迦葉および舍利弗・目犍連等を調伏す』と云々。天台云
わく「いかにいわんや未來をや。理、化し難きに在るなり」
等云々。妙樂云わく「障りいまだ除かざる者を怨となし、聞
くことを喜ばざる者を嫉と名づく」等云々。

南三北七の十師、漢土の無量の学者、天台を怨敵とす。
得一云わく「咄いかな智公よ。汝はこれ誰が弟子ぞ。三寸

に足らざる舌根をもつて、覆面舌の所説を謗ず」等云々。
東春に云わく「問う。在世の時そこばくの怨嫉あり。仏滅度の後この経を説く時、何が故ぞまた留難多きや。答えて曰わく、俗に良薬口に苦しと云うがごとく、この経は五乗の異執を廃して一極の玄宗を立つ。故に、凡を斥け聖を呵し、大を排し小を破し、天魔を銘じて毒虫となし、外道を説いて悪鬼となし、執小を貶つて貧賤となし、菩薩を拙めて新学となす。故に、天魔は聞くことを惡み、外道は耳に逆らい、二乘は驚怪し、菩薩は怯行す。かくのこと

と

るなん

おんしつおお

ことば

むな

きの徒、ことゞとく留難をなす。『怨嫉多し』の言、あに唐

しからんや』等云々。顯戒論に云わく「僧統奏して曰わく

西夏に鬼弁婆羅門有り、

東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。

せいか

きべんばらもんあ

とうど

ぎょうごん

は

とくずしゃもん

これ乃ち物類冥召して世間を誑惑す』等云々。論じて曰
わく○昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。
まこと

実なるかな、法華の『いかにいわんや』は』等云々。秀句に

い

かた

すなわ

ぞう

お

まつ

はじ

ち

たず

しゅうく

云わく「代を語れば則ち像の終わり末の初め、地を尋ぬれ

とう

ひがし

かつ

にし

ひと

たず

すなわ

ごじょく

しょう

とうじょく

すなわ

しょう

とうじょく

ば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生・鬪諍の

とき

きょう

い

おんしつおお

めつど

のち

時なり。経に云わく『なお怨嫉多し。いわんや滅度して後

をや』。この言、良に以有るなり』等云々。

夫れ、小兒に灸治を加うれば、必ず父母をあだむ。重病の者に良薬をあたうれば、定めて口に苦しとうれう。在世なおしかり、乃至像末辺土をや。山に山をかさね、波に波をたため、難に難を加え、非に非をますべし。

像法の中には天台一人、法華經・一切經をよめり。南北これをあだみしかども、陳・隋二代の聖主、眼前に是非を明らめしかば、敵ついに尽きぬ。像の末に伝教一人、法華經・一切經を仏説のごとく読み給えり。南都七大寺

蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我と明らかめ給い
しかば、また事なし。今、末法の始め二百余年なり。「いわ
んや滅度して後をや」のしるしに、闘諍の序となるべきゆ
えに、非理を前として、濁世のしるしに、召し合わせられ
ずして、流罪乃至寿にもおよばんとするなり。

されば、日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分
も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることは
おそれももいだきぬべし。定めて天の御計らいにもあずかる
べしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈

かえ はか わ み ほけきょう ぎょうじや
む。還つてこのことを計りみれば、我が身の法華経の行者
にあらざるか、また諸天善神等のこの国をすてて去り給え
るか、かたがた疑わし。
うたが
しよてんせんじんとう くに 捨 さ たま
しかるに、法華経の第五の巻の勸持品の一十行の偈は、
にちれん ほけきょう だいご まき かんじほん にじゅうぎょう げ
日蓮だにもこの国に生まれずば、ほどうど世尊は大妄語の
ひと はちじゅうまんおくなゆた ぼさつ だいば せそん だいもうご
人、八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし。
きよう い もろもろ むち ひと あつく めりとう とうじょう
経に云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、刀杖・
がしゃく くわ あ とううんぬん いま よ み にちれん
瓦石を加うるもの有らん」等云々。今の世を見るに、日蓮よ
ほか しよそう 誰 ひと ほけきょう しょにん あつく めり
り外の諸僧、たれの人か、法華経につけて諸人に悪口・罵詈

せられ、刀杖等を加えらるる者ある。日蓮なくば、この一偈
の未来記は妄語となりぬ。「悪世の中の比丘は、邪智にして
心詔曲なり」。また云わく「白衣のために法を説いて、世の
恭敬するところなること、六通の羅漢のごとくならん」。
これらの経文は、今の世の念佛者・禅宗・律宗等の法師
なくば、世尊はまた大妄語の人。「常に大衆の中に在つて
乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて」等。今世の僧
等、日蓮を讒奏して流罪せずば、この経文むなし。また云
わく「数々見擯出(しばしば擯出せられん)」等云々。日蓮、

ほけきょう

たびたび

流

さくさく

にじ

法華經のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかんが

せん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず。いわん

や余人をや。末法の始めのしるし「恐怖惡世の中」の金言の

合

あうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり。

れい

せそん

ふほうぞうきよう

のたま

まやきよう

わ

めつご

例せば、世尊、付法藏經に記して

云わく

「我が滅後

まやきよう

わ

わ

一百年に阿育大王といいう王あるべし。摩耶經に云わく「我

が滅後六百年に

わ

りゆうじゅばさつ

めつごろっぴやくねん

ひと

なんてんじく

い

ものち

百年に龍樹菩薩といいう人、南天竺に出すべし」。

だいひきよう

い

めつごろくじゅうねん

までんち

わ

大悲經に云わく「我が滅後六十年に末田地といいう者、地を

りゆうぐう

筑

竜宮につくべし」。これら、皆、仏記の「とくなりき。し

みな

ぶつき

たれ ぶつきよう しんじゅ

ほとけ

くふ

からずば、誰か仏教を信受すべき。しかるに、仏、「恐怖

あくせ のち みらいせ まつせ ほうめつ とき のち ごひやくさい

悪世」「しかる後の未来世」「末世の法滅せん時」「後の五百歳」

しよう みよう にほん まさ とき さだ とうせい ほつけ

なんだ、正・妙の二本に正しく時を定めたもう。当世、法華

さんりい ごうてき たれ ぶつせつ しんじゅ にちれん

の三類の強敵なくば、誰か仏説を信受せん。日蓮なくば、誰

ほけきよう ぎょうじや たれ ぶつせつ しんじゅ にちれん

をか法華経の行者として仏語をたすけん。南三北七・

しちだいじとう ほけきよう 助 かたき うち

七大寺等、なお像法の法華経の敵の内、いかにいわんや、

とうせい ぜん ほけきよう ほけきよう ほけきよう ねんぶつしゃとう のが

当世の禪・律・念佛者等は脱るべしや。

きょうもん わ みふこう ごかんき 被 ぼさつ みだんわく

経文に我が身符合せり。御勘氣をかばれば、いよいよ悦

よろこ

増

びをますべし。例せば、小乗の菩薩の未断惑なるが、

がんけんおごう もう

造

つみ

ふぼとう

ふぼとう

願兼於業と申して、つくりたくなき罪なれども、父母等の

じごく お だいく 受

み

形

こう

地獄に墮ちて大苦をうくるを見て、かたのごとくその業を

つく ねが じごく お くる

おな

く

か

造つて、願つて地獄に墮ちて苦しむに、同じ苦に代われる

よろこ じごく 堪 よろこ

とうじ

を悦びとするがごとし。これもまたかくのごとし。当時の

せ みらい あくどう だつ

とうじ

責めはたうべくもなけれども、未來の惡道を脱すらんと

おもえば悦びなり。

せけん うたが

じしん うたが

もう

ただし、世間の疑いといい、自心の疑いと申し、いか

てんたす たま しょてんとう しゅごしん ぶつぜん ごせんごん

でか天扶け給わざるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言

ほけきょう ぎょうしゃ

猿

ほけきょう

ぎょうじや

あり。法華経の行者には、さるになりとも法華経の行者と

どうして、早々に仏前の御誓言をとげんとこそおぼすべき
に、その義なきは我が身法華經の行者にあらざるか。この
疑いはこの書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれをか
く上、疑いを強くして答えをかまうべし。

季札といいし者は、心のやくそくをたがえじと、王の
重宝たる剣を徐君が墓にかく。王寿といいし人は河の水
を飲んで金の鵝目を水に入れ、弘演といいし人は腹をさい
て主君の肝に入る。これらは賢人なり。恩をほうずるなる
べし。

しゃりほつ かしようとう だいしょう にひやくじゅつかい さんせん
いわんや、舍利弗・迦葉等の大聖は、二百五十戒・三千
の威儀一つもかけず、見思を断じ三界を離れたる聖人なり。
梵帝諸天の導師、一切衆生の眼目なり。しかるに、四十余年
が間、「永不成仏」と嫌いすてはてられてありしが、法華経
の不死の良薬をなめて、熾れる種の生い、破れる石の合い、
枯れたる木の花菓などせるがごとく、仏になるべしと許
されて、いまだ八相をとなえず。いかでか、この經の重恩
をばほうぜざらん。もしほうぜづば、彼々の賢人にもおとり
て、不知恩の畜生なるべし。毛宝が龜はあおの恩をわすれ
ふちおん ちくしょう もうほう かめ 褥 おん

報

かれがれ

けんじん

劣

はなみ

唱

きょう

じゅうおん

か
ふし ろうやく 詈め
き
か
はつそう 唱
ほとけ 成
いし
あ
わ
お
たね
い
き
はなみ
き
か
はつそう 唱
ほけきょう
ほけきょう
けんじ
だん
さんかい
はな
じゅうよねん
しじゅうよねん
がんもく
いっさいしゅじょう
どうし
ぼんたいしょてん
けんじ
いぎひと
欠
の威儀一つもかけず、見思を断じ三界を離れたる聖人なり。
梵帝諸天の導師、一切衆生の眼目なり。しかるに、四十余年
が間、「永不成仏」と嫌いすてはてられてありしが、法華経
の不死の良薬をなめて、熾れる種の生い、破れる石の合い、
枯れたる木の花菓などせるがごとく、仏になるべしと許
されて、いまだ八相をとなえず。いかでか、この經の重恩
をばほうぜざらん。もしほうぜづば、彼々の賢人にもおとり
て、不知恩の畜生なるべし。毛宝が龜はあおの恩をわすれ
ふちおん ちくしょう もうほう かめ 褥 おん

か
ふし ろうやく 詈め
き
か
はつそう 唱
ほとけ 成
いし
あ
わ
お
たね
い
き
はなみ
き
か
はつそう 唱
ほけきょう
ほけきょう
けんじ
だん
さんかい
はな
じゅうよねん
しじゅうよねん
がんもく
いっさいしゅじょう
どうし
ぼんたいしょてん
けんじ
いぎひと
欠
の威儀一つもかけず、見思を断じ三界を離れたる聖人なり。
梵帝諸天の導師、一切衆生の眼目なり。しかるに、四十余年
が間、「永不成仏」と嫌いすてはてられてありしが、法華経
の不死の良薬をなめて、熾れる種の生い、破れる石の合い、
枯れたる木の花菓などせるがごとく、仏になるべしと許
されて、いまだ八相をとなえず。いかでか、この經の重恩
をばほうぜざらん。もしほうぜづば、彼々の賢人にもおとり
て、不知恩の畜生なるべし。毛宝が龜はあおの恩をわすれ
ふちおん ちくしょう もうほう かめ 褥 おん

こんめいいち

たいぎよ

いのち

おん

みょうじゅ

やちゅう

す、昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中に

捧

ささげたり。畜生すらなお恩をほうず。いかにいわんや

だいしょう

あなんそんじや

こくぼんおう

じなん

らごらそんじや

じょうぼんおう

大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は淨飯王

まご

にんちゅう

いえたか

うえ

じょうか

み

の孫なり。人中に家高き上、証果の身となつて成仏をおさ

はちねん

りょうぜん

せき

さんがいえ

とうしつっぽうけ

えられたりしに、八年の靈山の席にて山海慧・蹈七宝華な

によらい

ごう

授

たも

ほけきよう

んど如來の号をさづけられ給う。もし法華經ましまさづば、

家

高

だいしよう

たれ

くぎょう

いかにいえたかく大聖なりとも、誰か恭敬したてまつるべ
き。

か

けつ

いん

ちゅう

もう

ばんじょう

しゆ

どみん

き

え

夏の桀・殷の紂と申すは、万乘の主・土民の帰依なり。

しかれども、政あしくして世をほろぼせしかば、今に
惠者ものわるきものの手本には「桀紂、桀紂」とこそ申せ。下賤の
者、癩病の者も「桀紂のごとし」といわれぬれば、のら
れたりと腹たつなり。千二百・無量の声聞は、法華経まし
まさづば、誰か名をもきくべき、その音をも習うべき。一千
の声聞、一切経を結集せりとも、見る人もよもあらじ。
ましてこれらの人々を絵像・木像にあらわして本尊と仰ぐ
べしや。これひとえに、法華経の御力によつて一切の羅漢
帰依せられさせ給うなるべし。

もろもろ 諸の声聞、法華をはなれさせ給いなば、魚の水をはなれ、猿の木をはなれ、小児の乳をはなれ、民の王をはなれたるがごとし。いかでか法華経の行者をすて給うべき。
諸の声聞は爾前の経々にては肉眼の上に天眼・慧眼を得。法華経にして法眼・仏眼備われり。十方世界すらなおう。照見し給うらん。いかにいわんや、この娑婆世界の中、法華経の行者を知見せられざるべしや。たとい、日蓮、悪人にて、一言二言、一年二年、一劫ニ劫乃至百千万億劫、これらの声聞を悪口・罵詈し奉り、刀杖を加えまいらす

いろ

ほけきょう

しんこう

ぎょうじや

る色なりとも、法華經をだにも信仰したる行者ならば、す

たま

たと

ようち

ふぼ

罵

ふぼ

捨

て給うべからず。譬えば、幼稚の父母をのる、父母これをす

きょうちゅうはは

く

はは

はけいぢち

害

つるや。梟鳥母を食らう、母これをすてず。破鏡父をがい

ちち

従

ちくしょう

す、父これにしたがう。畜生すら、なおかくのごとし。大聖、

ほけきょう

ぎょうじや

す

法華經の行者を捨てしや。

しだいしようもん

りょうげ

もん

い

されば、四大声聞の領解の文に云わく「我らは今、真に

しようもん

ぶつどう

こえ

いっさい

き

これ声聞なり。仏道の声をもつて、一切をして聞かしめん。

われ

いま

しん

あらかん

もうもろ

せけん

てん

にん

ま

ぼん

我らは今、真に阿羅漢なり。諸の世間、天・人・魔・梵に

なか

まさ

くよう

う

おいて、あまねくその中ににおいて、應に供養を受くべし。

世尊は大恩まします。希有の事をもつて、憐愍・教化して、
我らを利益したもう。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あ
らん。手足もて供給し、頭頂もて礼敬し、一切もて供養す
とも、皆報ずること能わじ。もしもつて頂戴し、両肩に
荷負して、恒沙劫において、心を尽くして恭敬し、また
美膳・無量の宝衣および諸の臥具、種々の湯薬をもつて
し、牛頭栴檀および諸の珍宝、もつて塔廟を起て、宝衣
を地に布き、かくのごとき等の事、もつて供養すること
恒沙劫においてすとも、また報ずること能わじ」等云々。

もろもろ しょうもんとう

ぜんしみ きょうぎょう

ちじょく

幾

かしやく

諸の声聞等は、前四味の経々にいくそばくぞの呵責

こうむ

にんてんだいえ

なか

かず

を蒙り、人天大会の中にして恥辱がましきこと、その数を

かしようそんじや

ていきゅう こえ

さんぜん

響

しらず。しかれば、迦葉尊者の涕泣の音は三千をひびかし、

しゅぼだいそんじや

ぼうぜん

て いっぽつ

捨

しゃりほつ

はんじき

須菩提尊者は茫然として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食を

ふるな がびよう ふん い

きら

せそん

ろくやおん

はき、富樓那は画瓶に糞を入れると嫌わる。世尊、鹿野苑に

あごんきょう

さんたん

にひやくじゅつかい

し

しては阿含經を讚歎し、二百五十戒を師とせよなんだ慇懃

いま

わ

しょせつ

おんごん

にほめさせ給いて、今までいつのまに我が所説をばこうは

誇

たま

とが

もう

わ

しょせつ

そしらせ給うと、二言相違の失とも申しぬべし。

れい

せそん

だいばだつた

なんじぐにん

ひと

つばき

く

例せば、世尊、提婆達多を「汝愚人、人の唾を食らう」

めり

たま

どくや

むね

い

思

と罵詈せさせ給いしかば、毒箭の胸に入るがごとくおもいて、

恨

うらみて云わく「瞿曇は仏陀にはあらず。我は斛飯王の嫡子、

阿難尊者が兄、瞿曇が一類なり。いかにあしきことありとも、

ないきょうくん

あなんそんじや あに くどん いちるい

悪

内々教訓すべし。これら程の人天大会に、これ程の大禍を現

む

ほど

にんてんだいえ

ほど

たいか

げん

に向かつて申すもの、大人・仏陀の中にあるべしや。されば、

さきぞき

め

敵

者

だいにん

ぶつだ

うち

先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生々

せぜ だいおんてき

ちか

きよう

しようじよう

世々に大怨敵となるべし」と誓いしづかし。

おも いまもろもろ だいしょうもん

もと

げどう

これをもつて思うに、今諸の大声聞は、本、外道・

ぱらもん いえ

もろもろ

げどう

ちようじや

婆羅門の家より出でたり。また諸の外道の長者なりしか

しょおう きえ もろもろ だんな 尊
ば、諸王に帰依せられ、諸の檀那にたつとまる。あるいは種姓高貴の人もあり、あるいは富福充満のやからもあり。
は種姓高貴の人もあり、あるいは富福充満のやからもあり。
すじょうこうき ひと ふふくじゅうまん 輩
しかるに、彼々の榮官等をうちすて、慢心の幢を倒して、
ぞくふく ぬ かれがれ えいかんとう 打 捨 まんしん はたほこ たお
俗服を脱ぎ壞色の糞衣を身にまとい、白払・弓箭等をう
ぞくふく ぬ えじき ふんえ み 纏 びやくほつ きゆうせんとう
ちすてて一鉢を手ににぎり、貧人・乞丐なんどのごとくし
いっぽつ て 握 びんにん こつがい
て世尊につき奉り、風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ
せそん たてまつ ふうう ふせ いえ しんみよう 続
えじきぼうしょう 有様 ごてんしかい みなげどう でし
衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海、皆外道の弟子
だんな ほとけ くおう だいなん たも
檀那なれば、仏すら九横の大難にあい給う。いわゆる、提婆
だいな はな だいば
が大石をとばせし、阿闍世王の醉象を放ちし、阿耆多王の
たいせき 飛 あじやせおう すいぞう はな あぎたおう

めみやく ばらもんじょう

漿

旃

遮

ばらもんによ はち はら

伏

伏

伏

し。いかにいわんや、所化の弟子の数難申すばかりなし。

むりよう しゃくし はるりおう ころ せんまん けんぞく すいぞう 踏
無量の釈子は波瑠璃王に殺され、千万の眷属は醉象にふま
けしき びくに だいば 害

れ、華色比丘尼は提婆にがいせられ、迦盧提尊者は馬糞にう
もつけんそんじや ちくじょう

ずまれ、目撃尊者は竹杖にがいせらる。

その上、六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云わ
く「瞿曇は閻浮第一の大悪人なり。彼がいたる処は三災
くどん えんぶだいいち だいあくにん かれ ところ さんさい

七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめ
しちなん さき たいかい しゆる 集
くどん だいせん しゆもく

たるがごとし。瞿曇がところには衆惡をあつめたり。いわ
くどん しゅあく

ゆる迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり。人身を受けたる者は忠孝を先とすべし。彼らは瞿曇にすかされて、父母の教訓をも用いず家をいで、王法の宣をもそむいて山林にいたる。一国に跡をとどむべき者にはあらず。されば、天にいたつたう。堪うべしともおぼえざりしに、またうちそうわざわいと、仏陀にもうちそいがたくてありしなり。人天大会の衆会の砌にて時々呵責の音をききしかば、いかにあるべしともおぼえず。ただあわつる心のみなり。

その上、大の大難の第一なりしは、淨名經の「それ汝に施さば、福田と名づけず。汝を供養せば、三惡道に墮つ」等云々。文の心は、仏菴羅苑と申すところにおわせしに、梵天・帝釈・日月・四天・三界の諸天・地神・龍神等、無数恒沙の大会の中にして云わく「須菩提等の比丘等を供養せん天人は三惡道に墮つべし」。これらをうちきく天人、これらの声聞を供養すべしや。詮ずるところは、仏の御言をもつて諸の二乘を殺害せさせ給うかと見ゆ。心あらん人々は仏をもうとみぬべし。されば、これらの人々は、仏

く ょう

序

しんみ よう

たす

を供養したてまつりしついでにこそ、わざかの身命をも扶けさせ給いしか。
たま

されば、事の心を案ずるに、四十余年の經々のみとか
され、法華八箇年の所説なくて御入滅ならせ給いたらまし
かば、誰の人かこれらの尊者をば供養し奉るべき。現身に
がきどう
餓鬼道にこそおわすべけれ。
こと こころ あん しじゅうよねん きょうぎよう 説

しかるに、四十余年の經々をば、東春の大日輪、寒氷
を消滅するがごとく、無量の草露を大風の零落するがごと
く、一言一時に「いまだ眞実を顯さず」と打ちけし、大風
いちごん いぢ
しょうめつ
とうしゅん だいにちりん かんぴょう
むりよう そうちろ だいふう れいらぐ
う 消 だいふう
しじつ あらわ
いちごん いぢ

こくうん 卷

おおぞら

まんげつ

しょ

せいてん

にちりん

の黒雲をまき、大虚に満月の処するがごとく、青天に日輪のか
懸かり給うがごとく、「世尊は法久しくして後、要ず當に
しんじつ と

眞実を説きたもうべし」と照らさせ給いて、華光如来・光明

によらいとう しゃりほつ かしようとう かつかく にちりん めいめい げつりん
如來等と、舍利弗・迦葉等を赫々たる日輪、明々たる月輪の
せそん ほうひさ のち かなら まさ

ごとく鳳文にしるし、龜鏡に浮かべられて候えばこそ、
によらい めつご にんてん しょだんなとう ぶつだ そうら
ごとく

如來の滅後の人天の諸檀那等には仏陀のごとくは仰がれ給
いしか。
みず 澄 つきかげ 惜
かぜ 吹 そともく 廉
しおうじや

水すまば、月影をおしむべからず。風ふかば、草木なびか
ざるべしや。法華経の行者あるならば、これらの聖者は、
ほけきよう ぎょうじや

大火の中をすぎても、大石の中をとおりても、とぶらわせ給
うべし。迦葉の入定もことにこそよれ、いかにとなりぬ
るぞ。いぶかしとも申すばかりなし。「後の五百歳」のあた
らざるか、「広宣流布」の妄語となるべきか、日蓮が法華経
の行者ならざるか。法華経を教内と下して別伝と称する
の大妄語の者をまぼり給うべきか。捨閑閣拋と定めて「法華経
の門をとじよ、巻をなげすてよ」とえりつけて法華堂を失
える者を守護し給うべきか。仏前の誓いはありしかども、
濁世の大難のはげしさを見て、諸天下り給わざるか。日月、

てん

しゅみせん 今

崩

うみ しお

ぞうげん

ぞうげん

天にまします。須弥山いまもくずれず。海の潮も増減す。

四季もかたのごとくたがわす。いかになりぬるやらんと、

大疑いよいよつもり 候。

たいぎ 積

そうるう

大疑いよいよつもり 候。

しょだいぼさつ

てんにんとう

また諸大菩薩・天人等のごときは、爾前の経々にして

きべつ 得

すいちゅう つき と

記別をうるようなれども、水中の月を取らんとするがごと

かげ 得

思

ふか

く、影を体とおもうがごとく、いろかたちのみあつて実義も

ほとけ 得

ごおん ふか

ふか

色 形

じつぎ

なし。また仏の御恩も深くて深からず。

せそん しょじょうどう

とき

せつきよう

ほうえ

世尊初成道の時は、いまだ説教もなかりしに、法慧

ぼさつ くどくりんぼさつ

こんごうどうぼさつ

こんごうぞうぼさつ

もうとう

もう

菩薩・功德林菩薩・金剛幢菩薩・金剛藏菩薩等など申せ

ろくじゅうよ だいぼさつ じっぽう しょぶつ こくど きょうしゅしゃくそん
し六十余の大菩薩、十方の諸仏の国土より教主釈尊の
御前に來り給いて、賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請いに
おもむいて、十住・十行・十回向・十地等の法門を説
き給いき。これらの大菩薩の説くところの法門は、釈尊に
習いたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も来つ
て法をとく、また釈尊にならいたてまつらず。總じて華嚴
会座の大菩薩・天竜等は、釈尊已前に不思議解脱に住せ
る大菩薩なり。釈尊の過去、因位の御弟子にやあるらん、
十方世界の先仏の御弟子にやあるらん、一代教主、

じっぽうせかい

せんぶつ

みでし

だいぼさつ

しゃくそん

いんい

みでし

だいぼさつ

しゃくそん

習

そう

けごん

たま

だいぼさつ

しゃくそん

しゃくそん

と

たま

じゅうじゅう

じゅうぎょう

じゅうせかい

じゅういぜん

と

みまえ

きた

たま

げんじゅぼさつ

もろもろ

ぼんてんとう

きた

こ

げだつがつとう

じゅうじとう

ほうもん

と

ぼさつ

じゅうじとう

ほうもん

と

しじょうしようがく ほとけ でし

始成正覺の仏の弟子にはあらず。

阿含・方等・般若の時、四教を仏の説き給いし時こそ、

ようやく御弟子は出来して候え。これもまた、仏の自説

なれども正説にはあらず。ゆえいかんとなれば、方等・般若

の別・円二教は華嚴經の別・円二教の義趣をいでず。彼の

別・円二教は教主釈尊の別・円二教にはあらず、法慧等の

大菩薩の別・円二教なり。これらの大菩薩は、人目には仏

の御弟子かとは見ゆれども、仏の御師ともいいぬべし。

世尊、彼の菩薩の所説を聴聞して智發して後、重ねて

方等・般若の別・円をとけり。色もかわらぬ華厳經の別・円にきょう
二教なり。されば、これらの大菩薩は釈尊の師なり。

華嚴經にこれらの菩薩をかずえて善知識ととかれしはこれなり。善知識と申すは、一向師にもあらず一向弟子にもあらずあることなり。藏・通二教はまた別・円の枝流なり。別・円二教をしる人、必ず藏・通二教をしるべし。人の師と申すは、弟子のしらぬ事を教えたるが師にては候なり。例せば、仏より前の一切の人天・外道は二天三仙の弟子なり。九十五種まで流派したりしかども、三仙の見を出でず。

きょうしゅしゃくそん

なら

つた

げどう

でし

教主釈尊も、かれに習い伝えて外道の弟子にてましませ

しが、苦行・樂行十二年の時、苦・空・無常・無我の理を

覚

い

名乗

げどう

でし

な

さとり出だしてこそ外道の弟子の名をば離れさせ給いて、

む

し

たま

たま

にんてん

だいし

あお

無師智とはなのらせ給いしか。また人天も大師とは仰ぎま

ぜんしみ

あいだ

きょうしゅしゃくそん

ほうえぼさつ

いらせしか。されば、前四味の間は、教主釈尊、法慧菩薩

とう

みでし

れい

もんじゅ

しゃくそんきゅうだい

おんし

もう

等の御弟子なり。例せば、文殊は釈尊九代の御師と申す

しょきょう

いちじ

と

説

たも

がごとし。つねは諸経に「二字も説かず」ととかせ給うも

これなり。

ほとけおんとしちじゅうに

とし

まかだいこくりようじゅせん

もう

やま

仏御年七十二の年、摩竭提国靈鷲山と申す山にして

むりょうぎきょう

たま

しじゅうよねん

きょうぎょう

無量義経をとかせ給いしに、四十余年の経々をあげて、

しよう

なか

収

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

枝葉をばその中におさめて「四十余年にはいまだ真実を顯さず」と打ち消し給うはこれなり。この時こそ諸大菩薩・諸

てんにんとう

うけたも

うけたも

じつぎ

じつぎ

じつぎ

じつぎ

もう

とき

しょだいぼさつ

しょだいぼさつ

しょだいぼさつ

しょだいぼさつ

天人等はあわてて実義を請ぜんとは申せしか。無量義経に

じつぎ

思

いぢごん

いぢごん

いぢごん

もう

もう

もう

もう

もう

もう

て実義とおぼしきこと一言ありしかども、いまだまことなし。

たと

つき

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

西山に及べども、諸人月の体を見ざるがごとし。

せいざん

およ

しょにんつき

たい

み

み

み

み

み

み

み

法華経方便品の略開三顕一の時、仏略して一念三千、

ほけきようほうべんぽん

りやくかいさんけんいち

とき

ほとけりやく

いたいとうざん

隠

隠

隠

隠

隠

隠

隠

心中の本懐を宣べ給う。始めのことなれば、ほととぎすの

しんちゅう

ほんかい

の

たも

はじ

音をねおびれたる者の一音ききたるがよう、月の山の半
ばをば出でたれども薄雲のおおえるがごとくかそかなりし
を、舍利弗等驚いて諸の天・竜神・大菩薩等をもよお
して、「諸の天・竜神等は、その数恒沙のごとし。仏を
求むる諸の菩薩は、大数八万有り。また諸の万億国の
転輪聖王は至れり。合掌し敬心をもつて、具足の道を聞
きたてまつらんと欲す」等とは請ぜしなり。文の心は、
四味三教、四十余年の間、いまだきかざる法門うけたま
わらんと請ぜしなり。

この文に「具足の道を聞きたてまつらんと欲す」と申す
は、大経に云わく「薩とは具足の義に名づく」等云々。無依
無得大乗四論玄義記に云わく「沙とは訳して六と云う。
胡法には六をもつて具足の義となすなり」等云々。吉藏の疏
に云わく「沙とは翻じて具足となす」等云々。天台、玄義の
八に云わく「薩とは梵語、沙には妙と翻ずるなり」等云々。
付法藏の第十三、真言・華嚴・諸宗の元祖、本地は法雲
自在王如来、迹に龍猛菩薩、初地の大聖、大智度論千巻
の肝心に云わく「薩とは六なり」等云々。妙法蓮華經と申
るも

かんご

がつし

さだるまふんだりきやそたらん

もう

すは漢語なり。月支には薩達磨分陀利迦蘇多攬と申す。

ぜんむいさんぞう

ほけきょう

かんじんしんごん

い

のうまくさんまんだ

善無畏三藏の法華経の肝心真言に云わく「曩謨三曼陀

ぼだなんきみょうふぶつだおんさんじんによらいあああんなくかいじごにゅう

没駄南帰命普仏陀、唵三身如來、阿阿暗惡開示悟入、

さるばばだいつさいぶつ

きのうち

さきしゃびや

けんぎやぎやのう

薩縛勃陀

きのう

さきしゃびや

けん

三娑縛如虛空性、羅乞叉爾離塵相なり、薩哩達磨正法

さんそばによこくうしようあらきしゃにりじんそうさつりだるましようほう

なり、浮陀哩迦白蓮華、蘇駄覽經、惹入、吽遍、

ばんさ

ばざらけんご

あらきしゃまん

おうごううん

鏹作、發歡喜、縛曰羅堅固、羅乞叉鉢擁護、吽

くうむそうむがんそわか

けつじょうじょうじゅ

しんごんなんてんじく

〈空無相無願〉、娑婆訶決定成就」。この真言は南天竺

てつとうなか

ほけきょう

かんじん

しんごん

かんじん

なか

の鉄塔の中の法華経の肝心の真言なり。この真言の中に

さつりだるま

もう

しょうほう

さ
もう

しょう

しょう

「薩哩達磨」と申すは正法なり。薩と申すは正なり。正

みよう

みよう
しよう

しようほつけ

みようほつけ

は妙なり、妙は正なり。正法華、妙法華これなり。また妙法蓮華經の上に南無の二字をおけり。南無妙法蓮華經これなり。

みよう

ぐそく ろく

ろくどまんぎょう

もろもろ

ぼさつ

ろくどまんぎょう

みよう

ぐそく ろく

じっかい

じっかい

じっかい

ぐそく

様

聞

思

ぐ

じっかい

ごぐ

そく

もう

妙とは具足、六とは六度万行、諸の菩薩の六度万行を

みよう

じっかい
とうい
よかい

まんぞく
ぎ

き

いちいち
みなみよう

具足するようをきかんとおもう。具とは十界互具、足と申す

は一界に十界あれば当位に余界あり、満足の義なり。この

きょういちぶはつかんにじゅうはっぽんろくまんきゅうせんさんびやくはちじゅうしじ
いちいち
みなみよう

経一部八卷二十八品六万九千三百八十四字、一々に皆妙

いちじ
そな

さんじゅうにそなはちじゅうこう

ぶつだ

じっかい

みな

の一宇を備えて三十一相八十種好の仏陀なり。十界に皆

己界の仏界を顯す。妙樂云わく「なお仏果を具す。余果もまたしかり」等云々。

仏これを答えて云わく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云々。衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは一闡提、衆生と申すは九法界。衆生無邊誓願度、ここに満足す。「我は本誓願を立てて、一切の衆をして、我がごとく等しくして異なることながらしめんと欲しき。我が昔の願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ」等云々。

諸大菩薩・諸天等、この法門をきいて領解して云わく「我

らは昔より來、しばしば世尊の説を聞きたてまつるに、

いまだかつてかくのごとき

深妙の上法を聞かず

等云々。

伝教大師云わく『我らは昔より來、しばしば世尊の説

を聞きたてまつるに』とは、昔法華經の前に華嚴等の大法

を説くを聞けども、と謂うなり。『いまだかつてかくのごと

き深妙の上法を聞かず』とは、いまだ法華經の唯一仏乘

の教えを聞かざるを謂うなり』等云々。華嚴・方等・般若・

深密・大日等の恒河沙の諸大乗經は、いまだ一代の肝心た

る一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等をいま

聞

りょうげ

だきかずと領解せり。

開目抄下

また今よりこそ、諸の大菩薩も梵帝・日月・四天等も
教主釈尊の御弟子にては候え。されば、宝塔品には、こ
れらの大菩薩を仏我が御弟子等とおぼすゆえに、諫曉し
て云わく「諸の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこ
の經を護持し読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説

強おお くだ
もろもろ だいぼさつ たと
け」とはしたたかに仰せ下せしか。また諸の大菩薩も「譬
えば大風の小樹の枝を吹くがごとし」等と、吉祥草の大風
に隨したがい、河水の大海上引くがごとく、仏には隨したがいまいら
せしか。

りょうぜん ひあさ

ゆめ

現

しかれども、靈山日浅くして夢のごとく、うつつならず
ありしに、証前しようぜんの宝塔ほうとうの上に起後うえの宝塔ほうとうあつて、十方の
諸仏來集みなわせる、皆我が分身ふんじんなりとなのらせ給たまい、宝塔ほうとうは
虛空に、釈迦しゃか・多宝坐たほうざを並べ、日月の青天に並出じっっぽうせるが
ごとし。人天大会は星をつらね、分身の諸仏は大地の上、
虚空に、諸仏來集みなわせる、皆我が分身ふんじんなりとなのらせ給たまい、宝塔ほうとうは
虚空に、釈迦しゃか・多宝坐たほうざを並べ、日月の青天に並出じっっぽうせるが
ごとし。人天大会は星をつらね、分身の諸仏は大地の上、

宝樹の下の師子のゆかにまします。

けごんきょう れんげぞうせかい

じっぽう

し ど

ほうぶつ

おのおの

くにぐに

華嚴經の蓮華藏世界は、十方・此土の報仏、各々に国々に

か

かい

ほとけ

ど
きた

ふんじん

名 乗

かい

して、彼の界の仏この土に来つて分身とならば、この界

ほとけ
か

かい

行

ほうえとう

だいぼさつ

たが

らいえ

の仏彼の界へゆかず、ただ法慧等の大菩薩のみ互いに來会せり。大日經・金剛頂經等の八葉九尊・三十七尊等、

だいにちきょう

こんごううちょうきょうとう

はちようくそん

さんじゅうしちそんとう

大日如來の化身とはみゆれども、その化身、三身円滿の古仏

だいほんきょう

せんぶつ

あみだきょう

ろくまん

こぶつ

しょぶつ

こぶつ

にあらず。大品經の千仏、阿彌陀經の六方の諸仏、いまだ

らいじゅう
ほとけ

だいじつきょう

らいじゅう
ほとけ

ほとけ

ふんじん

來集の仏にあらず。大集經の來集の仏また分身ならず。

こんこうみょうきょう

しほう

しぶつ

けしん

そ

いつさいきょう

なか

金光明經の四方の四仏は化身なり。總じて一切經の中に

かくしゅかくぎょう さんじんえんまん しょぶつ あつ わ ふんじん 説
各修各行の三身円満の諸仏を集めて我が分身とはとかれ
ず。

じゅりょうほん おんじよ しじょうしじゅうよねん しゃくそん いつこう
これ寿量品の遠序なり。始成四十余年の釈尊、一劫・
じつこうとういぜん しょぶつ あつ ふんじん 説
十劫等已前の諸仏を集めて分身ととかる。さすが平等意趣
ふんじん せき

驚

しじょう ほとけ

にもにず、おびただしくおどろかし。また始成の仏ならば

しょけじつぽう

じゅうまん

ふんじん とく そな

所化十方に充満すべからざれば、分身の徳は備わりたりと

じげん

益

てんだいい

ふんじんすで おお

まさ

も示現してえきなし。天台云わく「分身既に多ければ、当に

じょうぶつ ひき

ひき

とううんぬん だいえ

驚

知るべし、成仏の久しきことを」等云々。大会のおどろき

ここころ 書

し意をかかれたり。

うえ じゅせんがい だいぼさつ だいち しゅつたい しゃくそん
その上に、地涌千界の大菩薩、大地より出来せり。釈尊
に第一の御弟子とおぼしき普賢・文殊等にもにるべくもな
し。華嚴・方等・般若・法華経の宝塔品に来集せる大菩薩、
大日経等の金剛薩埵等の十六大菩薩なんども、この菩薩
に対当すれば、獮猴の群がる中に帝釈の來り給うがごとし。
山人に月卿等のまじわれるにことならず。補処の弥勒すら、
なお迷惑せり。いかにいわんや、その已下をや。
この千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします。いわゆ
る上行・無辺行・淨行・安立行なり。この四人は虚空・

りょうぜん しょだいぼさつとう まなこ 合 いこころ 及 けごんきょう
靈山の諸大菩薩等、眼もあわせ、心もおよばず。華嚴經
の四菩薩、大日經の四菩薩、金剛頂經の十六大菩薩等も、
この菩薩に對すれば、翳眼のものの日輪を見るがごとく、
海人が皇帝に向かい奉るがごとし。太公等の四聖の衆中
にありしににたり。商山の四皓が惠帝に仕えしにことなら
ず。巍々堂々として尊高なり。釈迦・多宝・十方の分身を除
いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。
弥勒菩薩、心に念言すらく「我は、仏の太子の御時よ
り、三十成道、今の靈山まで四十二年が間、この界の

菩薩、十方世界より來集せし 諸の大菩薩、皆しりたり。

じつぼう じょうえど

おんつか

われ ゆげ

また十方の淨穢土に、あるいは御使い、あるいは我と遊戯して、その国々に大菩薩を見聞せり。この大菩薩の御師な

ほとけ

だいぼさつ けんもん

だいぼさつ はな

だいぼさつ きた

んどは、いかなる仏にてやあるらん。よも、この釈迦・

たほう じつぼう ふんじん ぶっだ

似

ほとけ

多宝・十方の分身の仏陀にはにあるべくもなき仏にてこそわすらめ。雨の猛きを見て 竜の大なることをしり、華の大な

み いけ 深 知 み りゆう だい

知

はな

だい

くに たれ もう ほとけ 会

知

だいぼさつ

だいほう きた

るを見て池のふかきことはしんぬべし。これらの大菩薩の来

くに たれ もう ほとけ 会

れる國、また誰と申す仏にあいたてまつり、いかなる大法

なら しゅ たも うたが

をか習い修し給うらん」と疑わし。

いぶか

こえ

出

あまりの不審しさに音をもいだすべくもなけれども、
佛力にやありけん、弥勒菩薩疑つて云わく「無量千万億
大衆の諸の菩薩は、昔よりいまだかつて見ざるところな
り。この諸の大威徳・精進の菩薩衆は、誰かそれがため
に法を説き、教化して成就せる。誰に従つてか初めて発心
し、いずれの仏法を称揚せる○世尊よ。我は昔より來、
いまだかつてこの事を見ず。願わくは、その従るところの
国土の名号を説きたまえ。我は常に諸国に遊べども、いま
だかつてこの事を見ず。私はこの衆の中において、いまし

いにん し い ねが
一人をも識らず。忽然に地より出でたり。願わくは、その
因縁を説きたまえ」等云々。

いんねん と こううんぬん
天台云わく「寂場より已降、今座より已往、十方の大士
らいえ た かぎ
來会して絶えず。限るべからずといえども、我は補尅の智力
じやくじょう このかた こんざ いおう じっぽう だいし
み

をもつて、ことごとく見、ことごとく知る。しかるに、こ
しゅ
いにん し
の衆においては一人をも識らず。しかるに、我は十方に遊戯
われ じっぽう ゆげ
して諸仏に観奉し、大衆は快く識知するところなり」等云々。

みょうらくい しおぶつ ごんぶ だいしゆ よ しきち
妙樂云わく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。
こううんぬん

きょうしゃく こうろふんみょう せん
經釈の心分明なり。詮ずるところは、初成道よりこ
しょじょうどう

しどじっぽう
のかた、此土・十方にて、これらの菩薩を見たてまつらず、
きかずと申すなり。

もうち

ほとけ

うたが

こた

のたま

あいった

なんだち

むかし

仏この疑いを答えて云わく「阿逸多よ〇汝等が昔よ

もの

われ

しゃばせかい

りいまだ見ざるところの者は、私はこの娑婆世界において

あのくたらさんみやくさんぽだい

えお

もろもろ

ぼさつ

阿耨多羅三藐三菩提を得已わつて、この諸の菩薩を

きょうけ

じどう

こころ

じょうぶく

どう

こころ

おこ

教化・示導し、その心を調伏して、道の意を発さしめた

とう

い

われ

がやじょうぱだいじゅ

もと

ざ

り」等。また云わく「我是伽耶城菩提樹の下において坐し

さいしようがく

じょう

え

い

むじょう

ほうりん

てん

て、最正覺を成ざることを得て、無上の法輪を転じ、し

すなわ

きょうけ

はじ

どうしん

おこ

かして乃ちこれを教化して、初めて道心を発さしむ。今、

いま

皆不退に住せり乃至我は久遠より來、これらの衆を教化せり」等云々。

ここに弥勒等の大菩薩、大いに疑いおもう。華嚴經の時、法慧等の無量の大菩薩あつまる。いかなる人々なるらんと

おもえば、「我が善知識なり」とおおせられしかば、さもや

とうちおもいき。その後の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩

もしかのごとし。この大菩薩は彼らにはにるべくもなき、

ふりたりげにまします。定めて釈尊の御師匠かなんどおぼ

しきを、「初めて道心を発さしむ」とて、「幼稚のものども

古い

はじ

どうしん

おこ

ようち

者

然

打

思

思

わ

ぜんちしき

仰

のち

だいほうぼう

びやくろちとう

らいえ

だいぼさつ

かれ

似

さだ

しゃくそん

おんしそう

らいえ

だいぼさつ

思

うたが

みろくとう

だいぼさつ

おお

うたが

集

うたが

けごんきょう

とき

うたが

ひとびと

うたが

けごんきょう

とき

うたが

けごんきょう

とき

うたが

みなふたい

じゅう

ないしわれ

くおん

このかた

しゆ

きょうけ

きょうけ

でし

仰

おお

なりしを教化して弟子となせり」なんどおおせあれば、大い

うたが

なる疑いなるべし。日本

にほん しょうとくたいし
の聖徳太子は、人王第三十二代

にんのうだいさんじゅうにだい

ようめいてんのう みこ 用明天皇の御子なり。御年六歳の時、百濟

おんとしろくさい とき ひやくさい

こうらい とうど

・高麗・唐土よ

ろうじん

渡

ろくさい

たいし わ

でし

り老人どものわたりたりしを、六歳の太子「我が弟子なり」

仰

か

ろうじん

がつしよう

わ し

とおおせありしかば、彼の老人どもまた合掌して「我が師

とううんぬん

ふしき

げてん もう

もの

し

なり」等云々。不思議なりしことなり。外典に申す「ある者

みち

みち

辺

としきんじゅう

若

者

道をゆけば、路のほとりに年三十ばかりなるわかもものが

はちじゅう

ろうじん

捕

う

八十ばかりなる老人をとらえて打ちけり。『いかなること

間

ろうおう

わ

こ

もう

語

ぞ』ととえば、『この老翁は我が子なり』なんど申す」とかた

るにもにたり。

似

されば、弥勒菩薩等 疑つて云わく「世尊よ。如來は太子

とき

しゃく

みや

い

世尊 によらい たいし

たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、

どうじょう

ざ

道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得た

あのかた

はじ

しじゅうよねん

す

がやじょう さ じょう

まえり。これより已来、始めて四十余年を過ぎたり。世尊よ。

しようじ

おお

ぶつじ な

なか

とう

いかんぞこの少時において、大いに仏事を作したまえる」等

うんぬん

いつきい

ぼさつ

はじ

けごんきょう

しじゅうよねん

ええ

うたが

云々。一切の菩薩、始め華嚴經より四十余年、会々に疑い

設

いつきいしゅじょう

ぎもう

晴

なか

なか

うたが

だいいち

をもうけて一切衆生の疑網をはらす中に、この疑い第一

うたが

むりようぎきょう

だいしょうごんとう

はちまん

だいじ

の疑いなるべし。無量義經の大莊嚴等の八万の大士、

しじゅうよねん いま りやつこう しつじょう うたが

りょうか

りょうか

四十余年と今との歴劫・疾成の疑いにも超過せり。

かんむりようじゅきょう

いだいけぶにん

あじやせおう

だいば

賺

觀無量寿經に、韋提希夫人の子・阿闍世王の、提婆にすか

ちち おう 禁 はは こころ

ぎば がっこく

されて父の王をいましめ母を殺さんとせしが耆婆・月光に

威 放 とき ほとけ しよう

おどされて母をはなちたりし時、仏を請じたてまつて、

だいいち と い われ むかし なん つみ

まず第一の問いに云わく「我、宿、何の罪あつてか、この

あくし う せそん なん

いんねん あ

だいばだつた

悪子を生める。世尊はまた何らの因縁有つてか提婆達多と

けんぞく

とううんぬん

うたが

なか

せそん

ともに眷属となりたまえる」等云々。この疑いの中に「世尊

なん いんねん あ

とう うたが

おお

だいじ

せそん

はまた何らの因縁有つてか」等の疑いは大いなる大事なり。

りんおう

かたき

共

う

たいしゃく

き

共

輪王は敵とともに生まれず、帝釈は鬼とともにならず。仏

ほとけ

むりょうこう

じひしゃ

だいおん

在

かえ

は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨とともににはまします。還
つて仏にはましまざざるかと疑うなるべし。しかれども、
ほとけこた たま

仏答え給わづ。されば、觀經を讀誦せん人、法華經の
だいばほん い かんぎょう どくじゅ ひと ほけきょう
提婆品へ入らば、いたずらごとなるべし。大涅槃經に迦葉
ぼさつ さんじゅうろく と 徒 事 だいねはんきょう かしよう

菩薩の三十六の問い合わせもこれには及ばず。されば、仏この
うたが は およ およ ほとけ 同 ほうまつ

疑いを晴らせ給わづば、一代の聖教は泡沫にどうじ、
いつさいしゅじょう ぎもう いちだい しようぎょう ほうまつ

一切衆生は疑網にかかるべし。寿量の一品の大なる、
これなり。

その後、仏、寿量品を説いて云わく「一切世間の天・
のち ほとけ じゅりょうほん と のたま いつさいせけん てん

人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云々。この経文は、始め寂滅道場より終わり法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。

「しかるに、善男子よ、我は實に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。この文は、華嚴經の三処の「始めて正覺を成す」、阿含經に云わく「初めて成す」、淨名經の「始めて仏樹に坐す」、大集經に云わく

はじ

じゅうろくねん

だいにちきょう

われ

むかしどうじょう

ざ

「始めて十六年」、大日経の「我は昔道場に坐す」、

にんのうきょう

にじゅうくねん

むりょうぎきょう

われ

さき

どうじょう

ほけきょう

仁王経の「二十九年」、無量義経の「我は先に道場」、法華経

ほうべんぽん

い

われ

はじ

ざ

いちごん

の方便品に云わく「我は始め道場に坐す」等を、一言に

だいこもう

破

文

大虚妄なりとやぶるもんなり。

かこじょうあらわ

とき

みな

しゃくそん

ふんじん

この過去常顯るる時、諸仏、皆、釈尊の分身なり。

にぜん

しゃくもん

とき

しょぶつ

しゃくそん

かた

なら

かくしゅかくぎょう

みな

爾前・迹門の時は、諸仏、釈尊に肩を並べて各修各行

ほとけ

故

しょぶつ

ほんぞん

もの

しゃくそんとう

の仏なり。かるがゆえに、諸仏を本尊とする者、釈尊等を

くだ

いま

けごん

だいじょう

ほうどう

はんにや

だいにちきょうとう

しょぶつ

みな

下す。今、華嚴の台上、方等・般若・大日經等の諸仏は皆、

しゃくそん

けんぞく

ほとけ

さんじゅうじょうどう

おんとき

だいぼんてんのう

釈尊の眷属なり。仏、三十成道の御時は、大梵天王・

第六天等の知行の娑婆世界を奪い取り給いき。今、爾前・
迹門にして十方を淨土とごうしてこの土を穢土ととかれ
しを打ちかえして、この土は本土となり、十方の淨土は
垂迹の穢土となる。

私は久遠の仏なれば、迹化・他方の大菩薩も教主釈尊
の御弟子なり。一切経の中にこの寿量品ましまさづば、天
に日月の無く、国に大王の無く、山河に珠の無く、人に神
のなからんがごとくしてあるべきを、華嚴・真言等の権宗
の智者とおぼしき澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往権宗の

ひとびと

みづか

えきよう

さんたん

い

人々、かつは自らの依經を讚歎せんために、あるいは云わ
く「華嚴經の教主は報身、法華經は應身」、あるいは云わ
く「法華寿量品の仏は無明の辺域、大日經の仏は明の
分位」等云々。雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讒
すれば、黄石も玉とみえ、諛臣も賢人かとおぼゆ。今、濁世
の学者等、彼らの讒義に隠されて、寿量品の玉を覗ばず。
また天台宗の人々もたばらかされて、金石一同のおもい
をなせる人々もあり。

ほとけくじゅう

しおけ

すく

仏久成にましまさずば所化の少なかるべきことを弁う

わきま

べきなり。月は影を慳しまざれども、水なくばうつるべからず。仏、衆生を化せんとおぼせども、結縁うすければ八相を現ぜず。例せば、諸の声聞が初地・初住にはのぼれども、爾前にして自調自度なりしかば、未来の人相をごするなるべし。しかれば、教主釈尊始成ならば、今この世界の梵帝・日月・四天等は、劫初よりこの土を領すれども、四十余年の仏弟子なり。靈山八年の法華結縁の衆、今まいりの主君におもいつかず、久住の者にへだてらるるがごとし。

今、久遠実成あらわれぬれば、東方の薬師如来の日光・

月光、西方の阿弥陀如来の觀音・勢至、乃至十方世界の諸仏

の御弟子、大日・金剛頂等の両部の大日如来の御弟子の諸

大菩薩、なお教主釈尊の御弟子なり。諸仏、釈迦如來の

分身たる上は、諸仏の所化申すにおよばず。いかにいわん

や、この土の劫初よりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊

の御弟子にあらずや。

しかるを、天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり。

俱舎・成実・律宗は三十四心斷結成道の釈尊を本尊と

せり。天尊の太子、迷惑して我が身は民の子とおもうがご
とし。華厳宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗
の宗なり。法相・三論は勝応身ににたる仏を本尊とす。
大王の太子、我が父は侍とおもうがごとし。華厳宗・
真言宗は、釈尊を下げる盧舍那・大日等を本尊と定む。
天子たる父を下げて、種姓もなき者の法王のごとくなるに
つけり。淨土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とお
もつて教主をすてたり。禪宗は下賤の者一分の徳あつて
父母をさぐるがごとし。仏をさげ、經を下す。これ皆、本尊

に迷えり。例せば、三皇已前に父をしらず、人皆禽獸に同ぜしがごとし。

じゅりょうほん

しょしゅう

もの

ちく

おな

ふちおん

もの

寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ。

みょうらくい

いちだい

おし

なか

不知恩の者は

り。故に、妙樂云わく「一代の教えの中に、いまだかつて

おん

あらわ

ふぼ

じゅ

とお

遠を顕さず。父母の寿は○もし父の寿の遠きを知らずんば、

ふとう

くに

まよ

ちち

じゅ

また父統の邦に迷う。いたずらに才能と謂うとも、全の人

さいのう

い

まつた

ひと

の子にあらず」等云々。妙樂大師は唐の末、天宝年中の者

とううんぬん

みょうらくだいし

とう

まつ

てんぽうねんちゅう

もの

なり。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗ならびに依經を、

えきよう

えきよう

しょしゅう

えきよう

かんが

ひろ

けごん

ほつそう

しんごんとう

しょしゅう

見

ふか

ひろ

かんが

じゅりょうほん

ほとけ

寿量品の仏をしらざる者は父統の

ふとう

もの

ふとう

もの

ひとみなきんじゅう

ひとみなきんじゅう

ひとみなきんじゅう

ひとみなきんじゅう

ひとみなきんじゅう

くに

まよ

さいのう

ちくしょう

書

さいのう

邦に迷える才能ある畜生とかけるなり。「いたずらに才能と謂うとも」とは、華嚴宗の法藏・澄觀乃至真言宗の善無畏三藏等は才能の人師なれども、子の父を知らざるがごとし。

伝教大師は日本顕密の元祖。秀句に云わく「他宗の依るところの經は一分仏母の義有りといえども、しかもただ愛のみ有つて嚴の義を闕く。天台法華宗は嚴・愛の義を具す。一切の賢聖、学・無学および菩提心を發せる者の父なり」

とううんぬん
等々々。

真言・華厳等の経々には種・熟・脱の三義、名字すら

無

なおなし。いかにいわんや、その義をや。華厳・真言経等

いつしようしょじ そくしんじょうぶつとう

きょう ごんきょう

かこ

の一生初地の即身成仏等は、経は権経にして過去を

隱

しゆ

知

だつ

ちようこう

くらい

かくせり。種をしらざる脱なれば、趙高が位にのぼり、

どうきょう おうい こ

道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

まか

けん

あらさ

よ

諍

きょう

宗々互いに権を諍う。予これをあらそわず、ただ経に

まか

ほけきょう

しゅ

よ

てんじんぼさつ

しゅしむじょう

た

けごんきょうないしょだいじょうきょう

た

任すべし。法華経の種に依つて天親菩薩は種子無上を立て

てんだい いちねんさんぜん

みないちねんさんぜん

だいにちきょうとう

たり。天台の一念三千これなり。華嚴経乃至諸大乗経、

だいにちきょうとう

しよそん

しゅし

みないちねんさんぜん

てんだい いちしゃ だいし

大日經等の諸尊の種子、皆一念三千なり。天台智者大師

いちにん

ほうもん

えたま

一人、この法門を得給えり。

けごんしゅう

ちょうかん

ぬす

けごんきょう

こころ

たく

華厳宗の澄觀、この義を盜んで華嚴經の「心は工みな

えし

もん たましい

しんごん だいにちきょうとう

にじょう

る画師のごとし」の文の神とす。真言・大日經等には二乗
作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。善無畏三藏、震旦

きた

のち てんだい しかん

み ちほつ

だいにちきょう

こころ

に来つて後、天台の止觀を見て智發し、大日經の「心の

じつそう われ いっさい ほんじよ

いちねんさんぜん

ほうもん

もん たましい

てんだい いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

実相」「我は一切の本初なり」の文の神に、天台の一念三千

ぬす い しんごんしゅう かんじん

いちねんさんぜん

かんじん

もん たましい

てんだい いちねんさんぜん

うえ いん しんごん

を盗み入れて真言宗の肝心として、その上に印と真言とを

飾 ほけきよう だいにちきょう

しおうれつ

はん

とき

りどうじしよう

かざり、法華經と大日經との勝劣を判ずる時、理同事勝の

しゃく 釈をつくれり。

りょうかい まんだら にじょうさぶつ じつかいごぐ いちじょう だいにちきょう
両界の曼陀羅の一乘作仏・十界互具は、一定、大日經
にありや。第一の誑惑なり。故に、伝教大師云わく「新來
の真言家は則ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華嚴家は則
ち影響の軌模を隠す」等云々。俘囚の島などにわたつて
「ほのぼのといううたは、われよみたり」など申さば、
えぞていの者はさゝそとおもうべし。漢土・日本の学者ま
たかくのぞとし。良諧和尚云わく「真言・禪門・華嚴・三論
乃至もし法華等に望まば、これ接引門なり」等云々。
善無畏三藏の閻魔の責めにあづからせ給いしは、この

せいむいさんぞう

えんま

せ

与

たま

う

う

ないし ほつけどう のぞ

りょうしょかしよう しんごん ぜんもん けごん さんろん

夷 体 もの 思 かんど にほん がくしゃ

ようじゅう き ぱ かく とううんぬん ふしう しま 渡
しんごんけ すなわ ひつじゅ そうじょう ほろ くとう けごんけ すなわ
ゆえ でんぎょうだいしい しんらい

だいいち おうわく

だい

う

え

う

う

りょうかい まんだら にじょうさぶつ じつかいごぐ いちじょう だいにちきょう

じゃけん

のち
ここる

翻

ほけきょう
きぶく

邪見による。後に心をひるがえし、法華経に帰伏してこそ、
このせめをば脱れさせ給いしか。その後、善無畏・不空等、
法華経を両界の中央におきて大王のごとくし、胎藏の大
日経、金剛頂経をば左右の臣下のごとくせし、これな
り。日本の弘法も、教相の時は華嚴宗に心をよせて法華経
をば第八におきしかども、事相の時には実慧・真雅・円澄・
光定等の人々に伝え給いし時、両界の中央に上のごとく
おかれたり。

例せば、三論の嘉祥は、法華玄十卷に法華経を第四時、
置

えにはにさだ
会二破二と定むれども、天台に帰伏して七年つかえ、講を廃し衆を散じて身を肉橋となせり。法相の慈恩は法苑林七卷十二巻に「一乗は方便なり、三乗は真実なり」等の妄言多し。しかれども、玄贊の第四には「故に、また両つながら存す」等と我が宗を不定になせり。言は両方なれども、心は天台に帰伏せり。華厳の澄觀は、華厳の疏を造つて華嚴・法華相対して、法華を方便とかけるに似たれども、「彼の宗にはこれをもつて実となす。この宗の立義、理としで通ぜざることなし」等とかけるは、悔い還すにあらずや。

こうぼう

ききょう

わ
おもて

かたき

弘法もまたかくのごとし。龜鏡なれば我が面をみず、敵なれば我が非をしらず。真言等の諸宗の学者等、我が非をしらざりしほどに、伝教大師にあいたてまつて自宗の失をしるなるべし。

されば、諸経の諸の仏菩薩・人天等は、彼々の経々にして仏にならせ給うようなれども、実には法華経にして正覚なり給えり。釈迦・諸仏の衆生無辺の總願は、皆この経において満足す。「今、すでに満足しぬ」の文これなり。

よ こと よし 推 はか けごん かんぎょう だいにちきょうとう
予、事の由をおし計るに、華厳・觀經・大日經等をよ
しゅぎょう ひと きょうぎょう ほとけ ぼさつ てんとうしゅご たも
み修行する人をば、その経々の仏・菩薩・天等守護し給
うらん。疑いあるべからず。ただし、大日經・觀經等を
うたが うたが うたが うたが うたが うたが うたが
ぎょうじやとう ほけきょう ぎょうじや ぎょうじや ぎょうじや ぎょうじや ぎょうじや
よむ行者等、法華經の行者に敵対をなさば、彼の行者を
ほけきょう ぎょうじや しゅご
すてて法華經の行者を守護すべし。例せば、孝子、慈父の
おうてき ちち おう 参 こう いた
王敵となれば、父をすてて王にまいる、孝の至りなり。仏法
おう こう いた
もまたかくのごとし。法華經の諸の仏菩薩・十羅刹、日蓮
ほけきょう もろもろ ぶつぼさつ じゅうらせつ にちれん
を守護し給う上、淨土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩、
しゅご たま うえ じょうどしゅう ろくまん しょぶつ じゅうらせつ にちれん
真言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護
しんごんしゅう せんにひやくとう しちしゅう しょそん しゅご ぜんじん にちれん しゅご

たま

れい

しちしゅう

しゅごしん

でんぎょうだいし

守

たま

し給うべし。例せば、七宗の守護神、伝教大師をまぼり給
いしがごとしとおもう。

思

にちれんあん

い

ほけきょう

にしょさんえ

ざ

日蓮案じて云わく、法華経の一処三会の座にましましし

にちがつとう

しょてん

ほけきょう

ぎょうじやしゅつたい

じしやく

くるがね

す

日月等の諸天は、法華経の行者出来せば、磁石の鉄を吸

つき

みず うつ

しゅゆ

きた

ぎょうじや

うがごとく、月の水に遷るがごとく、須臾に来つて行者に

か

ぶつぜん おんちか

果

たも

代わり仏前の御誓いをはたさせ給うべしとこそおぼえ候

にちれん

訪

たま

にちれん

ほけきょう

ぎょうじや

覚

そうろう

に、今まで日蓮をとぶらい給わぬは、日蓮、法華経の行者
にあらざるか。されば、重ねて経文を勘えて、我が身にあ

み
とが

てて身の失をしるべし。

うたが
い
とうせい
ねんぶつしや
ぜんしゅうとう
ちげん
ほけきょう
てきじん
いつさいしゅじょう
あくちしき
知
智眼をもつて法華経の敵人、一切衆生の悪知識とはしるべきや。

こた
い
わたくし
ことば
い
きょうしやく
答えて云わく、私の言を出だすべからず。経釈の

みようきょう

い

ほうぼう

しゅうめん

浮

とが

見

明鏡を出だして謗法の醜面をうかべ、その失をみせしめ

しょうもう

ちから

ほけきょう

だいし

ほうとうほん

い

ん。生盲は力およばず。法華経の第四の宝塔品に云わく

とき

たほうぶつ

ほうとう

うち

はんざ

わ

「その時、多宝仏は宝塔の中において、半座を分かちて、
しゃかむにぶつ
あた
とき
だいしゆ
にによらい
しつぽうとう
釈迦牟尼仏に与えたもう○その時、大衆は、一如來の七宝塔

なか

ししざ

うえ

ましま

けつかふざ

み
の中の師子座の上に在して結跏趺坐したもうを見たてま

だいおんじょう

ししゅ

つ

たれ

つる○大音声だいおんじょうをもつて、あまねく四衆しぷしゅに告げたまわく『誰だれか能くこの娑婆國土しゃばこくどにおいて、広く妙法華經ひろみょうほけきようを説かん。今正いままさしくこれ時ときなり。如來は久しうからずして、當に涅槃ねはんに入るべし。仏はこの妙法華經みょうほけきようをもつて、付囑ふぞくして在ること有らしめんと欲す』と等云々。第一の勅宣だいいちなり。

また云わく「その時、世尊は重ねてこの義ぎを宣べんと欲して、偈を説いて言わく『聖主世尊は、久しく滅度めつどしたもうといえども、宝塔ほうとうの中うちに在して、なお法のために來りたまえり。諸人はいかんぞ勤めて法のためにせざらん○また

しょにん

つと

ほう

げ
い
のたま
ほつ
ひさ
めつど
ほつ
ひさ
きた

わ ふんじん むりょう しょぶつ じこうじやとう きた ほう き
我が分身、無量の諸仏は、恒沙等の^ごとく、來り法を聽か
んと欲して○各 妙土および弟子衆、天・人・竜神、諸
の供養の事を捨てて、法をして久しう住せしめんが故に、
ここに來至したまえり○譬えば大風の小樹の枝を吹くが
ごとし。この方便をもつて、法をして久しう住せしむ。諸
の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこの經を護持し
読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説け』と。第二
の鳳詔なり。

「多宝如来、および我が身の集むるところの化仏は、當に
たほうによらい わ み あつ けぶつ まさ

この意を知るべし〇諸の善男子よ。各 蹄らかに思惟せよ。これはこれ難事なり。よろしく大願を発すべし。諸余の經典は、數恒沙のことし。これらを説くといえども、いまだ難しとなすに足らず。もし須弥を接つて、他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさず〇もし仏滅して後、悪世の中において、能くこの經を説かば、これは則ち難しとなす〇たとい劫焼に、乾ける草を担い負つて、中に入つて焼けざらんも、またいまだ難しとなさず。我滅度して後に、もしこの經を持つて、一人のためにも説かば、

すなわ かた もろもろ ゼンナンシ われめつ のち
これは則ち難しとなす○諸の善男子よ。我滅して後にお
いて、誰か能くこの経を護持し読誦せん。今、仏前におい
て、自ら誓言を説け』等云々。第三の諫勅なり。第四・第五
の二箇の諫曉、提婆品にあり。下にかくべし。
きょうもん こころ がんぜん せいてん だいにちりん か
この経文の心は眼前なり。青天に大日輪の懸かれるが
ごとし、白面に靄のあるににたり。しかれども、生盲の者
じやげん もの いちげん おのおのみずか し おも もの
と邪眼の者と一眼のものと、「各自らを師と謂う」の者、
へんしゅうけ もの 見 ばんなん 捨 どうしん もの 記
辺執家の者はみがたし。万難をすべて道心あらん者にしるし
とどめてみせん。西王母がそののもも、輪王出世の優曇華よ

留

せいおうぼ

園

桃

りんとうしゅつせ

うどんげ

遭

はいこう こうう はちねんかんど

よりとも

りもあいがたく、沛公が項羽と八年漢土をあらそいし、頼朝
と宗盛が七年秋津島にたたかいし、修羅と帝釈と、金翅鳥
と竜王と阿耨池に諍えるも、これにはすぐべからずとし
るべし。

にほんこく

ほうあらわ

に ど

でんぎょうだいし にちれん

ちからおよ

日本国にこの法顯ること二度なり。伝教大師と日蓮
となりとしれ。無眼のものは疑うべし。力及ぶべからず。

きょうもん

にほん かんど

がつし

りゅうぐう てんじょう

じっぽうせかい

この経文は、日本・漢土・月氏・竜宮・天上・十方世界の
いつきいきよう しょうれつ しゃか たほう じっぽう ほとけらいじゅう
一切経の勝劣を、釈迦・多宝・十方の仏來集して定め給
さだ たも

うなるべし。

と

い

けごんきょう

ほうどうきょう

はんにやきょう

じんみつきょう

問うて云わく、華嚴經・方等經・般若經・深密經・

りょうがきょう

だいにちきょう ねはんぎょうとう

楞伽經・大日經・涅槃經等は、九易の内か六難の内か。

こた

い

けごんしゅう とじゅん ちごん ほうぞう ちようかんとう さんぞう

答えて云わく、華嚴宗の杜順・智儼・法藏・澄觀等の三藏

だいし よ

い

けごんきょう ほけきょう

だいし よ

しょせつないしり

おな

ろくなん うち な

しほん かん

べつ

おな

にきょう

おな

二経なれども、所説乃至理、これ同じ。『四門の觀は別なる

しんたい み

おな

も、真諦を見ることは同じ』のごとし。法相の玄奘三蔵・

じおんだいしとう よ

い

おな

じんみつきょう

ほつそう ほけきょう

おな

慈恩大師等、読んで云わく、「深密經と法華經とは同じく

ゆいしき ほうもん よ

い

おな

だいさんじ きょう ろくなん うち

さんろん きちぞう

たい

唯識の法門にして第三時の教、六難の内なり」。三論の吉藏

とう よ い

い

はんにやきょう

ほけきょう

おののおのこと

等、読んで云わく、「般若經と法華經とは名異なるも体は

おな
にきょう
いっぽう
ぜんむいさんぞう
こんごうちさんぞう
ふくうさんぞう
同じ。一經は一法なり。善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏
とう
よ
い
等、読んで云わく「大日經と法華經とは理同じ。おなじく
ろくなん
うち
きょう
だいにちきょう
ほけきょう
りおな
六難の内の經なり」。日本の弘法、読んで云わく「大日經
ろくなん
くい
うち
にほん
こうぼう
よ
い
は六難九易の内にあらず。大日經は釈迦の説くところの
いつさいきょう
ほか
ほつしんだいにちによらい
だいにちきょう
しゃか
と
一切經の外、法身大日如來の所説なり。またある人云わ
けごんきょう
ほうしんによらい
しょせつ
ろくなんくい
うち
しょせつ
ひとい
く「華嚴經は報身如來の所説、六難九易の内にはあらず」。
しじゅう
がんそどう
けん
よ
この四宗の元祖等かようすうせん
がくとどう
なが
汲
数千の学徒等もまたこの見をいです。
にちれん
歎
い
かみ
しょにん
ぎ
そ
う
ひ
日蓮なげいて云わく、上の諸人の義を左右なく非なりと

とうせい しょにんおもて む ひ ひ 重
いわば、当世の諸人面を向くべからず。非に非をかさね、
けっく こくしゅ ざんそう いのち およ われ じふ
結句は國主に讒奏して命に及ぶべし。ただし、我らが慈父、
そうりんさいご ごゆいごん のたま ほう よ ひと よ
双林最後の御遺言に云わく「法に依つて人にいらざれ」等
うんぬん ひと よ とう しょえ にえ さんえ だいしえ
云々。「人にいらざれ」等とは、初依・二依・三依・第四依、
ふげん もんじゅとう とうがく ぼさつ ほうもん と たま きょう て
普賢・文殊等の等覚の菩薩、法門を説き給うとも、經を手
握 もち
ににぎらざらんをば用いるべからず。「了義經に依つて
ふりようききよう よ さだ きょう なか りょうぎ ふりようききよう
不了義經にいらざれ」と定めて、經の中にも了義・不了義經
きゅうめい しんじゅ そうちら りゆうじゅ ぼさつ
を糾明して信受すべきこそ候いぬれ。龍樹菩薩の
じゅうじゅうびばしゃろん い しゅたら よ こくろん

十住毘婆沙論に云わく「修多羅にいらざるは黒論なり。

しゅたら よ びやくろん とううんぬん てんだいだいしい しゅたら
修多羅に依るは白論なり」等云々。天台大師云わく「修多羅
と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受す
べからず」等云々。伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝
を信ずることなけれ」等云々。円珍智証大師云わく「文に依
つて伝うべし」等云々。

かみ 捧 しょし しゃく みないちぶんいちぶん きょうろん よ
上にあぐるところの諸師の釈、皆一分一分、経論に依つ
て勝劣を弁うるようなれども、皆自宗を堅く信受し先師
の謬義をたださざるゆえに、「曲げて私情に会す」の勝劣な
り、「己義を莊嚴す」の法門なり。仏の滅後の犢子・方広、

後漢已後の外典は、仏法外の外道の見よりも、三皇五帝の
儒書よりも、邪見強盛なり、邪法巧みなり。華嚴・法相・
真言等の人師、天台宗の正義を嫉むゆえに、実経の文を会
して権義に順ぜしむること強盛なり。しかれども、道心あ
らん人、偏党をすて、自他宗をあらそわず、人をあなざる
ことなかれ。

法華經に云わく「已今當」等云々。妙樂云わく「たとい
經有つて『諸經の王なり』と云うとも、『已今當の説に最
もこれ第一なり』とは云わづ」等云々。また云わく「已今當

の妙、こゝにおいて固く迷えり。謗法の罪は、苦長劫に流
る」等云々。この經釈におどろいて、一切經ならびに人師
の疏釈を見るに、狐疑の氷とけぬ。今、真言の愚者等、印・
真言のあるをたのみて「真言宗は法華經にすぐれたり」と
おもい、「慈覺大師等の真言勝れたりとおおせられねれば」
などおもえるは、いうにかいなきことなり。
密嚴經に云わく「十地・華嚴等の大樹と神通と、勝鬘お
よび余経とは、皆この經より出でたり。かくのごときの
密嚴經は、一切經の中に勝れたり」等云々。

だいとうんきょう　い　大雲經に云わく「この經は即ちこれ諸經の転輪聖王
なり。何をもつての故に。この經典の中に衆生の實性・
仮性・常住の法藏を宣説するが故に」等云々。

ぶつしうう　じようじゅう　ほうぞう　せんぜつ　とううんぬん

なに　ゆえ　きょううてん　なか　しゅじょう　じつしうう

きょうう　すなわ　しょきょう　てんりんじょうおう

六波羅蜜經に云わく「いわゆる過去無量の諸仏の説くと
ころの正法、および我が今説くところのいわゆる八万四千
の諸の妙法蘊○摂めて五分となす。一には索咀纜、二に
は毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜、五には
陀羅尼門なり。この五種の藏もて有情を教化す○もし彼の
有情、契經・調伏・対法・般若を受持すること能わず、
うじよう　かいきょう　じようぶく　たいほう　はんにや　じゅじ　あた

うじょう もろもろ あくびう しじゅう はちじゅう ごむけんざい
あるいはまた有情、諸の悪業・四重・八重・五無間罪・
ぼうほうどうきょう いつせんだいとう しゅじゅ じゅうさい つく
謗方等經・一闡提等の種々の重罪を造るに、消滅して
そくしつ げだつ とみ ねはん さと かれ しょうめい
速疾に解脱し、頓に涅槃を悟ることを得せしめ、彼がため
もうもろ だらにぞう と いつ ほうぞう たと にゅう
に諸の陀羅尼藏を説く。この五つの法藏は、譬えば乳・
らく しようそ じゅくそ たえ だいご だいご たと
酪・生蘇・熟蘇および妙なる醍醐のござし〇總持門は、譬え
だいご あじ にゅう らく そ なか みみょうだいいち
ば醍醐のござし。醍醐の味は、乳・酪・蘇の中に微妙第一
だいご あじ よ もろもろ やまい のぞ うじょう しんしんあんらく
にして、能く諸の病を除き、諸の有情をして身心安樂
そうじもん かいきょうとう なか もつと だいいち よ
ならしむ。總持門は、契經等の中に最も第一となす。能く
じゅうざい のぞ とううんぬん
重罪を除く」等云々。

解深密經に云わく「その時に、勝義生菩薩また仏に白して言さく『世尊、初め一時において波羅毘斯の仙人墮處の施鹿林の中に在して、ただ声聞乗を發趣する者のためにのみ、四諦の相をもつて正法輪を転じたまいき。これはなはだ奇、はなはだこれ希有にして、一切世間の諸の天人等、先より能く法のごとく転ずる者有ることなしといえども、彼の時において転じたもうところの法輪は有上なり、有容なり、これいまだ了義ならず、これ諸の諍論安足の処所なり。世尊、在昔第一時の中に、ただ發趣して大乗

しゆ

もの

いつさい

ほう

かいむじしよう

むしょうむめつ

を修する者のためにのみ、一切の法は皆無自性・無生無滅・

ほんらいじやくじよう
じしようねはん

おんみつ
そう

本来寂靜・自性涅槃なるによつて、隱密の相をもつて

しょうほんりん

てん

正法輪を転じたまいき。さらにはなはだ奇にして、はなは

けう

だこれ希有なりといえども、彼の時ににおいて転じたもうと

ほうりん

うじよう

か

とき

てん

ころの法輪、またこれ有上なり、容受するところあり、な

りょうぎ

もうもろ

じょうろんあんそく

ところ

おいまだ了義ならず、これ諸の諍論安足の処所なり。

せそん
いまだいさんじ
なか

世尊、今第三時の中において、あまねく一切乗を發趣する

もの

いっさい
ほう

かいむじしよう
むしょうむめつ

ほんらいじやくじよう

じじょうねはん

者のために、一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・

むじしよう

しそう

自性涅槃にして無自性の性なるによつて、顯了の相をも

けんりよう

そう

しょうほうりん

てん

だいいち

甚

き

もつと

つて正法輪を転じたもう。第一はなはだ奇にして、最も

けれう いませそんてん ほうりん むじょう むよう

これ希有なり。今世尊転じたもうところの法輪、無上・無容

しん りょうぎ もろもろ じょうろんあんそく ところ

にして、これ真の了義なり。諸の諍論安足の処所にあら

ず』と等云々。

だいはんにやきょう い

ちようもん

よ

しゅつせ

ほう

大般若経に云わく「聴聞するところの世・出世の法に

したが

みなよ

ほうべん

はんにやじんじん

りしゅ

えにゆう

もろもろ

隨つて、皆能く方便もて般若甚深の理趣に会入し、諸の

ぞうさ

せけん

じごう

はんにや

ほつしよう

い

もの

み

とううんぬん

造作するところの世間の事業もまた般若をもつて法性に
会入し、一事として法性を出づる者を見ず』等云々。

えにゆう

いちじ

ほつしよう

い

み

とううんぬん

だいにちきょうだいいち

い

ひみつしゅ

だいじょうぎょう

むえんじょう

大日經第一に云わく「秘密主よ。大乗行あり。無縁乗

の心を發す。法に我性無し。何をもつての故に。彼の往昔
かくのことく修行せし者のごとく、蘊の阿賴耶を觀察して、
じしよう まぼろし もの
自性は幻のごとしと知る」等云々。また云わく「秘密主よ。
かれ とううんぬん い ひみつしゆ
彼はかくのことく無我を捨て、心主自在にして、自心の
ほんぶしよう さと とううんぬん
本不生を覺る」等云々。また云わく「いわゆる空性は根境
はな むそう とううんぬん
を離れ、無相にして境界無く、諸の戲論に越えて虚空に
とうどう ないしぐくむじよう とううんぬん
等同なり乃至極無自性」等云々。また云わく「大日尊は、
ひみつしゅ のたま
秘密主に告げて言わく『秘密主よ。いかんが菩提。謂わく、
じつ ぼだい い
実のごとく自心を知る』と」等云々。

けごんきょう　い　いつさいせかい　もうもろ　ぐんじょう　しょうもんどう　もと
華嚴經に云わく「一切世界の諸の群生、声聞道を求め
んと欲すること有ること渺し。縁覚を求むる者は転たまた
少なし。大乗を求むる者ははなはだ希有なり。大乗を求む
ることはなお易しとなし、能くこの法を信ずることははな
はだ難しとなす。いわんや、能く受持し、正憶念し、説の
ごとく修行し、眞實に解せんをや。もし三千大千界をもつ
て頂戴すること一劫、身動ぜざらんも、彼の所作いまだ難
しどなさず。この法を信ずるははなはだ難しとなす。
大千塵数の衆生の類いに一劫、諸の樂具を供養するも、彼

の功德いまだ勝れたりとなさず。この法を信するは殊に勝れたりとなす。もし掌たなをもつて十仏刹じゅうぶつせつを持ち、虚空こくうの中において住じゅうすること一劫なるも、彼の所作いまだ難しとなさず。この法を信することははなはだ難しとなす。

十仏刹塵じゅうぶつせつじんの衆生しゆじょうの類たぐいに一劫諸いつこうもろもろの樂具らくぐを供養らくようせんも、

彼の功德いまだ勝れたりとなさず。この法を信することは殊に勝れたりとなす。十仏刹塵じゅうぶつせつじんの諸もうもうの如來によらいを一劫恭敬いつこうくぎょうして供養せんに、もし能くこの品を受持せば、功德は彼より最も勝れたりとなす」等云々。

涅槃經に云わく「この諸の大乗方等經典も、また無量の功德を成就すといえども、この經に比せんと欲するに、喻えとなすことを得ず。百倍千倍百千万、乃至算数・譬喻も及ぶこと能わざるところなり。善男子よ。譬えば、牛より乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生蘇を出だし、生蘇より熟蘇を出だし、熟蘇より醍醐を出だすに、醍醐は最上にして、もし服することあらば、衆病皆除こり、あらゆる諸の薬もことごとくその中にに入るがごとし。善男子よ。仏もまたかくのことし。仏より十二部經を出だせんなし。ほとけ

しゅたら い しゅたら ほうどうきょう い
じゅうにぶきょう しゅたら ほうどうきょう い
し、十二部經より修多羅を出だし、修多羅より方等經を出
だし、方等經より般若波羅蜜を出だし、般若波羅蜜より
大涅槃を出だす。なお醍醐のごとし。醍醐と言うは、仏性
を喻う」等云々。

きょうもん ほけきょう いこんとう ろくなんくい そうたい
これららの經文を法華經の已今當・六難九易に相対すれば、
つき ほし くせん しゅみ あ 似

月に星をならべ、九山に須弥を合わせたるににたり。しか
れども、華嚴宗の澄觀、法相・三論・真言等の慈恩・嘉祥・
こうぼうとう ぶつげん ひと ひと もん 惑

弘法等の仏眼のごとくなる人、なおこの文にまどえり。い
かにいわんや、盲眼のごとくなる当世の学者等、勝劣を弁
もうげん とうせい がくしゃとう しょうれつ わきま

「くびやく

明

しゅみ

けし

うべしや。黑白のゞとくあきらかに、須弥・芥子のゞとく
なる勝劣なおまどえり。いわんや、虚空のゞとくなる理に
迷わざるべしや。教の浅深をしらざれば、理の浅深を弁う
るものなし。

者

かん 隔 もんぜんご

きょうもん いろわきま

もん

卷をへだて文前後すれば、教門の色弁えがたければ、文
を出だして愚者を扶けんとおもう。王に小王・大王、一切
に少分・全分、五乳に全喻・分喻を弁うべし。六波羅蜜經
は有情の成仏あつて無性の成仏なし。いかにいわんや
久遠実成をあかさず。なお涅槃經の五味におよばず。いか
くおんじつじよう 明 ねほんきよう ごみ 及

ほけきょう

しゃくもん

ほんもん

対

にいわんや、法華経の迹門・本門にたいすべしや。しかる

にほん こうぼうだいし

きょううもん

惑

たま

に、日本の弘法大師、この経文にまどい給いて、法華経を

だいし じゅくそみ い

たま

だいご

そうじもん

だいごみ

第四の熟蘇味に入れ給えり。第五の總持門の醍醐味すら

ねほんきょう

およ

たま

涅槃經に及ばず。いかにし給いけるやらん。しかるを「震旦

にんし あらそ

だいご

ぬす

てんだいとう

ぬすびと

書

たま

の人師、諍つて醍醐を盜む」と天台等を盜人とかき給えり。

お

こけんだいご

な

とう

じたん

「惜しいかな、古賢醍醐を嘗めず」等と自歎せられたり。

置

わ

いちもん もの

記

たにん

これらはさておく。我が一門の者のためにしるす。他人は

しん いっかく み はる すい

ぎやくえん

わ

いつたい

だいかい

潮

知

信ぜざれば、逆縁なるべし。一滴をなめて大海のしおをしり、

一花を見て春を推せよ。万里をわたつて宋に入らずとも、

さんかねん

へりょうぜん

りゅうじゅ

りゅうぐう

三箇年を経て靈山にいたらすとも、龍樹のぞとく竜宮に

むじやくぼさつ

みろくぼさつ

にしょ

入らずとも、無著菩薩のごとく弥勒菩薩にあわすとも、二所

さんえあ

いちだいしようれつ

知

三会に值わすとも、一代の勝劣はこれをしれるなるべし。

蛇は七日が内の洪水をしる、竜の眷属なるゆえ。鳥は

へびなのかうちこうずい

かこおんみようじ

とりからす

年中の吉凶をしれり、過去に陰陽師なりしゆえ。鳥はとぶ

とくひと

勝

徳、人にすぐれたり。日蓮は諸經の勝劣をしること、華厳

ちようかんさんろん

かじようほつそう

じょきようじよきよう

ほつそうじよん

じうぼう

けごん

こうぼう

の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、真言の弘法にすぐれた

てんだいでんぎよう

あと

勝

かひとびと

てんだい

り。天台・伝教の跡をしのぶゆえなり。彼の人々は天台・

でんぎようき

たま

ほうぼう

とがのが

たも

伝教に帰せさせ給わすば、謗法の失脱れさせ給うべしや。

とうせいにほんこく

だいいち

もの
にちれん

いのち

当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は

ほけきょう

な
こうだい
とど

だいかい
しゆ

い

法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし。大海の主とな

もろもろ

かしんみな
徒

しゅみせん
おう

もろもろ
さんじん

ねはんきょうしじゅつかん

れば、諸の河神皆したがう。須弥山の王に諸の山神し

ほけきょう

ろくなんくい
わきま

いつさいきよう

たがわざるべしや。法華経の六難九易を弁うれば、一切経

読
従

よまざるにしたがうべし。

ほうとうほん

さんか

ちょくせん

うえ

だいばほん

にか

かんぎょう

宝塔品の三箇の勅宣の上に、提婆品に二箇の諫曉あり。

だいばだつた

いつせんたい

てんのうによらい
き

だいばほん

にか

かんぎょう

提婆達多は一闡提なり。天王如来と記せらる。涅槃經四十卷

げんしよう

ほん

ぜんしよう
あじやせとう

むりよう

ごぎやく

ねはんきょうしじゅつかん

にか

かんぎょう

の現証は、この品にあり。善星・阿闍世等の無量の五逆・

ほうぼう

もの

ひと

舉

かしら

よろず

収

えだ

謗法の者の一りをあげ、頭をあげ、万をおさめ、枝を

従

いつさい

ごぎやく

しちぎやく

ほうぼう

せんだい

てんのうによらい

表

したがう。一切の五逆・七逆・謗法・闡提、天王如来にあらわ

お れ了わんぬ。毒薬変じて甘露となる。衆味にすぐれたり。

かんろ

しゅみ

勝

竜女が成仏、これ一人にはあらず。一切の女人の成仏を

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

あらわす。法華經已前の諸の大乗經には女人の成仏

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

をゆるさず。諸の大乗經には成仏・往生をゆるすよ

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

うなれども、あるいは改転の成仏にして一念三千の成仏

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

にあらざれば、有名無実の成仏・往生なり。「二を挙げて

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

諸に例す」と申して、竜女が成仏は末代の女人の

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

成仏・往生の道をふみあけたるなるべし。

じょうぶつ

いつさい

によにん

じょうぶつ

みち

踏

開

儒家の孝養は今生にかぎる。未來の父母を扶けざれば、
外家の聖賢は有名無実なり。外道は過・未をしつれども父母を
扶くる道なし。仏道こそ父母の後世を扶くれば、聖賢の名は
あるべけれ。しかれども、法華經已前等の大小乗の經宗
は、自身の得道なおかないがたし。いかにいわんや父母を
や。ただ文のみあつて義なし。今、法華經の時こそ、女人成仏
の時悲母の成仏も顯れ、達多の惡人成仏の時慈父の成仏
も顯るれ。この經は内典の孝經なり。二箇のいさめ了わ
んぬ。

いじょう ごか ほうしょう 驚

かんじほん ぐきょう

已上、五箇の鳳詔におどろきて、勧持品の弘経あり。

みようきょう きょうもん い とうせい ぜん りつ ねんぶつしや

しょ

明鏡の経文を出だして当世の禪・律・念佛者ならびに諸

だんな ほうぼう

檀那の謗法をしらしめん。

にちれん もの こぞのとしくがつじゅうににちねうしのとき くび 別

日蓮といいし者は、去年九月十一日子丑時に頸はねられ

ぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、雪中に

かえ

とし

にがつ

せつちゅう

しるして有縁の弟子へおくれば、おそろしくておそろしから

見 ひと 惡

しゃか

たほう

じっぽう

しょぶつ

ず。みん人いかにおじぬらん。これは釈迦・多宝・十方の諸仏

みらいにほんこくとうせい

暎

たも

みようきょう

形

見

見

の未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。かたみともみ

るべし。

かんじほん

い

ねが

うらおも

勸持品に云わく「ただ願わくは慮いをなしたまわざれ。

ほとけめつど のち くふあくせ なか われ まさ ひろ と

仏滅度して後、恐怖惡世の中において、我らは當に広く説く

ものもろ むちひと あつく めりとう われ とうじょう くわ

べし。諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖を加

るものあ われ みなまさ しの あくせ なか びく

うる者有らん。我らは皆當に忍ぶべし。惡世の中の比丘は、

じやち え おも え

邪智にして心詔曲に、いまだ得ざるを謂つて得たりとなし、

がまん こころ じゅうまん

我慢の心は充满せん。あるいは阿練若に納衣にして空閑に

あ みづか しん どう ぎょう おも あれんにや のうえ

在つて、自ら真の道を行ずと謂つて、人間を輕賤する者有

りよう とんじやく ゆえ びやくえ ほう と よ

らん。利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、世

くぎょう

の恭敬するとこなること、六通の羅漢のぞとくならん。

ろくつう らかん

この人は悪心を懷き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮りて、好んで我らが過を出ださん○常に大衆の中に在つて我らを毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かつて、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん○濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼はその身に入つて、我を罵詈・毀辱せん○濁世の惡比丘は、仏の方便、宜しきに隨つて説きたもうところの法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん』等云々。

記の八に云わく「文に三つあり。初めに一行は通じて邪人じやにんを明かす。即ち俗衆すなわなり。次に一行は道門増上慢ぞくしゆの者を明かす。三に七行は僭聖增上慢せんしょうぞうじょうまんの者を明かす。三に七行は僭聖增上慢ぞうじょうまんの者を明かす。この三つの中、初めは忍ぶべし。次は前に過ぐ。第三は最も甚しづかだし。後々の者は転た識り難きをもつての故に等云々。東春に智度法師ちどほつし云わく「初めに『諸の』より下の五行は○第一に一偈は三業の悪を忍ぶ。これ外の悪人なり。次に『悪世』より下の一偈は、これ上慢の出家人なり。第三に『あるいは阿練若あれんにやに』より下の三偈は、即ちこれ出家の処に一切の悪人を摄おさ

「等云々。また云わく『常に大衆の中に在つて』より下
の両行は、公処に向かつて法を毀り人を謗す』等云々。
涅槃經の九に云わく「善男子よ。一闡提有つて、羅漢の像
を作して空処に住し、方等大乗經典を誹謗す。諸の
凡夫人見已わつて、皆『眞の阿羅漢にして、これ大菩薩な
り』と謂わん』等云々。また云わく「その時、この経、閻浮提
において當に広く流布すべし。この時、當に諸の惡比丘有
つて、この経を抄略し、分かちて多分と作し、能く正法
の色香美味を滅すべし。この諸の悪人、またかくのこと

きょうてん

じくじゅ

によらい

じんみつ ようぎ

めつじょ

き經典を読誦すといえども、如來の深密の要義を滅除して世間の莊嚴の文飾・無義の語を安置す。前を抄つて後に著け、後を抄つて前に著け、前後を中心に著け、中を前後に著けまさし。當に知るべし、かくのごとき諸の惡比丘は、これ魔の伴侶なり」等云々。

六卷の般泥洹經に云わく「阿羅漢に似たる一闡提にして惡業を行ずるものと、一闡提に似たる阿羅漢にして慈心を作すものと有らん。羅漢に似たる一闡提有りとは、この諸の衆生の方等を誹謗せるなり。一闡提に似たる阿羅漢とは、

声聞を毀呰して広く方等を説き、衆生に語つて言わく『我、汝等とともににこれ菩薩なり。所以はいかん。一切皆、如來の性有るが故に』。しかるに、彼の衆生は、一闡提なりと謂わん』等云々。

涅槃經に云わく「我涅槃して後乃至正法滅して後、像法の中において、當に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しき経を読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す○袈裟を脱るといえども、なお獵師の細めに見て徐かに行くがごとく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、

らかん　え

そと

けんぜん　げん

うち

とんしつ

いだ

羅漢を得たり』と○外には賢善を現じ、内には貪嫉を懷く。

あほう　う
哩法を受けたる婆羅門等のごとし。

じつ

しゃもん

ばらもんとう
て沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん』等

じょうほう

ひぼう

とう

うんぬん
云々。

そ

じゅぶ

そうりん

にちがつ

びだん

とうしゅん

みょうきょう

とうせい

夫れ、鷲峰・双林の日月、毘湛・東春の明鏡に当世の

しょしゅう

こくちゅう

ぜん　りつ

ねんぶつしゃ

しゅうめん

う

諸宗ならびに國中の禪・律・念佛者が醜面を浮かべたる

いちぶん

曇

に、一分もくもりなし。

みょうほけきよう　い

ほとけめつど

のち

くふあくせ

なか

妙法華經に云わく「仏滅度して後、恐怖惡世の中において」。

あんらくぎょうほん　い

のち

あくせ

安樂行品に云わく「後の惡世において」。また云わく

まつせ なか

い

のち まつせ ほうめつ

ほつ
とき
ふんべつくどくほん
い
あくせまつぼう
とき

かんぜつほん
しようほけきよう

欲せん時において」。分別功德品に云わく「惡世末法の時」。

やくおうほん
い
のち
ごひやくきい
とううんぬん
しようほけきよう
かんぜつほん
薬王品に云わく「後の五百歳」等云々。正法華経の勸説品に

い
のち
まつせ
い
のち
まつせ
云わく「しかして後、末世に」。また云わく「しかして後來

まつせ
とううんぬん
てんぽんほけきよう
い
とう
の末世に」等云々。添品法華経に云わく等。

でんぎょうい
ぞうほう
ちゅう
なんさんほくしち
ほけきよう
おんてき

天台云わく「像法の中、南三北七は法華経の怨敵なり」。

でんぎょうい

伝教云わく「像法の末、南都六宗の学者は法華の怨敵な

り」等云々。彼らの時は、いまだ分明ならず。

とううんぬん
かれ
とき

きょうしゅしゃくそん
たほうぶつ
ほかとう

なか
にちがつ
なら

これは、教主釈尊・多宝仏、宝塔の中に日月の並ぶが

じつぱうふんじん

しょぶつ

じゅげ

ほし

なか

ゞとく、十方分身の諸仏、樹下に星を列ねたりし中にして、

しようほういつせんねん

ぞうほういつせんねん

にせんねん

過

まつぼう

はじ

正法一千年・像法一千年、一二千年すぎて末法の始めに

ほけきょう
おんてきさんい

はちじゅうまんおくなゆた

もろもろ

ぼさつ

法華経の怨敵三類あるべしと八十万億那由他の諸の菩薩

さだ
たま

こもう

の定め給いし、虚妄となるべしや。当世は如來の滅後

にせんにひやくよねん

だいち
さ

外

はる
はな

咲

二千一百余年なり。大地は指さばはざるとも、春は花はさか

ずとも、三類の敵人必ず日本国にあるべし。さるにては、

誰々
ひとびと
さるい
うち

たれびと

ほけきょう
さるい

たれたれの人々か三類の内なるらん、また誰人か法華経の

ぎようじや
さるい

指

か

さるい

行者なりとさされたるらん、おぼつかなし。彼の三類の

おんてき

われ

い

怨敵に我ら入りてやあるらん、また法華経の行者の内にて

ほけきょう

ぎようじや

うち

やあるらん、おぼつかなし。

周の第四昭王の御宇二十四年甲寅四月八日の夜中に、天に五色の光氣南北に亘つて昼のごとし。大地六種に震動し、雨ふらずして江河・井池の水まさり、一切の草木に花さき菓なりたりけり。不思議なりしことなり。昭王大いに驚き、太史蘇由占つて云わく「西方に聖人生まれたり」。昭王問うて云わく「この国いかん」。答えて云わく「事なし。一千年の後に、彼の聖言この国にわたつて衆生を利すべし」。彼のわざかの外典の、一毫もいまだ見思を断ぜざる者、

いつせんねん

知

ぶつきよう

しかれども一千年のことをしる。はたして、仏教、
一千一十五年と申せし後漢の第一明帝の永平十年丁卯年、
ぶっぽうかんど
仏法漢土にわたる。

これは似るべくもなき釈迦・多宝・十方分身の仏の御前
もうもう ぼさつ みらいき
の諸の菩薩の未来記なり。当世日本国に三類の法華経の
てきじん
敵人なるべしや。

されば、仏、付法藏経等に記して云わく「我が滅後に
しようほういつせんねん あいだ わ しようほう ひろ
正法一千年が間、我が正法を弘むべき人一十四人、次第
そうぞく かしよう あなんとう
に相続すべし」。迦葉・阿難等はさておきぬ、一百年の脇
いっぴやくねん きょう

比丘、六百年の馬鳴、七百年の龍樹菩薩等、一分もたが
既 い たま 虚 いぢぶん 違 いぢ

わざすでに出で給いぬ。このこと、いかんがむなしかるべ

そういう

いつきようみなそういう

き。このこと相違せば、一経皆相違すべし。いわゆる、

しゃりほつ

みらい

けこうによらい

かしよう

こうみょうによらい

みなもうせつ

舍利弗が未來の華光如來、迦葉の光明如來も、皆妄說とな

にぜんかえ

いちじょう

ようふじょうぶつ

しょしようもん

るべし。爾前返つて一定となつて、永不成仏の諸声聞な

いぬ

やかん

くよう

あなんとう

くよう

り。大・野干をば供養すとも、阿難等をば供養すべからず

となん。いかんがせん、いかんがせん。

だいいち

もうもろ

むち

ひとあ

い

きょうもん

だいに

第一の「諸の無智の人有らん」と云うは、經文の第二

あくせ

なか

びく

だいさん

のうえ

びく

だいだんなとう

の「惡世の中の比丘」と第三の「納衣の比丘」の大檀那等と

見えた。したがつて妙楽大師は「俗衆」等云々。東春に

云わく「公処に向かつて」等云々。

い
くじょ
む
とううんぬん
とうしゅん

第二の法華経の怨敵は、経に云わく「悪世の中の比丘は、

じやち

え

おも

え

か

邪智にして心詔曲に、いまだ得ざるを謂つて得たりとなし、

がまん

とき

い

きょう

我慢の心は充满せん」等云々。涅槃経に云わく「この時、

まさ
もうもろ

あくびくあ

ないし

もうもろ

あくにん

本当に諸の悪比丘有るべし乃至この諸の悪人、またかく

きょうてん

どくじゅ

によらい

じんみつ

ようぎ

のごとき經典を読誦すといえども、如來の深密の要義を

めつじょ

とううんぬん
しかん

い

しな

たか

しようきょう

滅除せん」等云々。止觀に云わく「もし信無くば、高く聖境

お
おの
ちぶん

を推して、己が智分にあらずとす。もし智無くば、増上慢

ぞうじょうまん

おも おのれほとけ ひと とううんぬん
を起こし、己 仏に均しと謂う」等云々。

どうしゃくぜんじ い

に り

ふか げ わず

よ

とううんぬん ほうねんい

しょぎょう き

とき うしな

とううんぬん

道綽禪師が云わく「二に理は深く解は微かなるに由る」等云々。法然云わく「諸行は機にあらず、時を失う」等云々。

き

じゅう い

おそ

ひとあやま

もの

しょしん

しょしん

記の十に云わく「恐らくは、人謬つて解せる者、初心の

くどく だい

し

く

じょうい

ゆず

しょしん

しょしん

功德の大なることを識らずして、功を上位に推り、この初心

あなど

ゆえ

いま

か

ぎょうあさ

くふか

しめ

を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、も

きようりき

あらわ

とううんぬん

でんぎょうだいしい

しょうぞう

す

つて経力を顯す」等云々。伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今

お

まつぼう

ちか

あ

ほつけいちじょう

き

いま

正しくその時なり。何をもつてか知ることを得る。まきときなに

あんらくぎょうほん い まつせ ほうめつ とき とううんぬん
安樂行品に云わく『末世の法滅せん時』となり』等云々。
えしんい にほんいつしゅう えんきじゅんいち とううんぬん
恵心云わく「日本一州、円機純一なり」等云々。
どうしゃく でんぎょう ほうねん えしん
道綽と伝教と、法然と惠心と、いずれこれを信ずべし
かれ いつさいきょう しょうもん
や。彼は一切経に証文なし。これは正しく法華経によれ
うえ にほんこくいちどう えいざん だいし じゅかい まさ
り。その上、日本国一同に叡山の大師は受戒の師なり。何ぞ、
てんま 付 ほうねん ここる 寄 わ ていす し
天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげすつる
ほうねんちしゃ なん しゃく せんちやく の わえ
や。法然智者ならば、何ぞこの釈を選択に載せて和会せ
ひとり 隠 もの だいに あくせ なか びく
ざる。人の理をかくせる者なり。第二の「悪世の中の比丘」
さ ほうねんとう むかい じやけん もの

涅槃經に云わく「我ら」とく邪見の人と名づく」等

い

われ

じやけん

ひと

な

とう

云々。妙樂云わく「自ら三教を指して、皆邪見と名づく」

みづか

さんぎょう

さ

みなじやけん

な

等云々。止觀に云わく「大經に云わく『これよりの前は我ら皆邪見の人と名づく』となり。邪あに悪にあらずや」等

あく

とう

ら皆邪見の人と名づく』となり。邪あに悪にあらずや」等

あく

とう

云々。弘決に云わく「邪は即ちこれ惡なり。この故に当に

まさ

ゆえ

し 知るべし、ただ円を善となす。また一つの意有り。一には

こころあ

いち

順うをもつて善となし、背くをもつて惡となす。相待の意

こころ

ぞうだい

なり○著するをもつて惡となし、達するをもつて善となす。

こころ

ぜん

相待・絶待ともにすべからく惡を離るべし。円に著するす

はな

えん

そうち

ぜつだい

あく

はな

えん

じやく

あく

はな

えん

じやく

あく

よ

とううんぬん

ら、なお悪なり。いわんやまた余をや」等云々。

げどう

ぜんあく

しょうじょうきょう

たい

みなあくどう

しょうじょう

外道の善惡は、小乘經に對すれば皆惡道。小乘の
善道、乃至四味三教は、法華經に對すれば皆邪惡。ただ法華

しょうぜん

にぜん

えん

そうだいみよう

ぜつだいみよう

たい

みなじやあく

ほつけ

のみ正善なり。爾前の円は相待妙。絶待妙に對すればな

あく

ぜんさんぎょう

せつ

あくどう

にぜん

かんぎよう

お悪なり。前三教に攝すればなお惡道なり。爾前のごとく

か

きょう

ごくり

ぎょう

あくどう

しょうほう

もと

彼の經の極理を行づる、なお惡道なり。いわんや、觀經

とう

けごん

はんにやきようとう

およ

しょうほう

かんぎよう

かんぎよう

等の、なお華嚴・般若經等に及ばざる小法を本として
ほけきよう かんぎよう と い かえ ねんぶつ たい かくほうへいしゃ
法華經を觀經に取り入れて、還つて念佛に對して閻拏閉捨

ほうねん

しょけ

でしどう

だんなとう

ひぼうしようほう

せるは、法然ならびに所化の弟子等・檀那等は誹謗正法の

もの
者にあらずや。

釈迦・多宝・十方の諸仏は、法をして久しく住せしめん
が故に、ここに来至したまえり。法然ならびに日本國の
念佛者等は、法華經は末法に念佛より前に滅尽すべしと。
さんしょう おんてき
あに三聖の怨敵にあらずや。

第三は法華經に云わく「あるいは阿練若に納衣にして
空閑に在つて乃至白衣のために法を説いて、世の恭敬する
ところとなること、六通の羅漢の」ときもの有らん」等云々。
ろっかん はつないおんぎょう い
らかん に
いっせんだい
あくごう
六卷の般泥洹經に云わく「羅漢に似たる一闡提にして惡業

を行ずるものと、一闡提に似たる阿羅漢にして慈心を作す
ものと有らん。羅漢に似たる一闡提有りとは、この諸の
衆生の方等を誹謗せるなり。一闡提に似たる阿羅漢とは、
声聞を毀訾して広く方等を説き、衆生に語つて言わく
『我、汝等とともにこれ菩薩なり。所以はいかん。一切皆、
如來の性有るが故に』。しかるに、彼の衆生は、一闡提な
りと謂わん』等云々。涅槃經に云わく「我涅槃して後○像法
の中において、當に比丘有るべし。律を持つに似像せて少し
く經典を読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す○袈裟

りょうし ほそ み しず い
き
を服るといえども、なお獵師の細めに見て徐かに行くがご
とく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、
羅漢を得たり』と○外には賢善を現じ、内には貪嫉を懷く。
啞法を受けたる婆羅門等のごとし。実には沙門にあらずし
て沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん』等
云々。妙樂云わく「第三は最も甚だし。後々の者は転た
識り難きをもつての故に」等云々。東春に云わく「第三に
『あるいは阿練若に』より下の三偈は、即ちこれ出家の処
に一切の悪人を摂む』等云々。

とうしゅん すなわ しゅつけ ところ いつさい あくにん おさ とう
東春に「即ちこれ出家の処に一切の悪人を摂む」等と
とうせいにほんこく とうじ なんと けんにんじ けんちようじ えいざん おんじょうう
は、当世日本国には、いずれの処ぞや。叡山か、園城か、
とうじ とうじ
東寺か、南都か、建仁寺か、寿福寺か、建長寺か、よくよ
尋 えんりやくじ しゅつけ こうべ かつちゅう 鎧 指
くたずぬべし。延暦寺の出家の頭に甲冑をよろうをさす
おんじょうじ ごぶんほっしん はだえ がいじょう たい
べきか。園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帯せるか。彼ら
きょうもん のうえ くうかん あ
は、経文に「納衣にして空閑に在り」と指すにはにず、「世
くぎょう
の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん
ひと
うた し がた ゆえ
と人おもわず、また「転た識り難きが故に」というべしや。
からく しようと
華洛には聖一等、鎌倉には良觀等ににたり。人をあだむ
かまくら りょうかんとう ひと 怨

まなこ

きょうもん

わ

み 合

ことなかれ。眼あらば、経文に我が身をあわせよ。

しかん

だいいち

せんだい

ぜんじゅう

あさ

止觀の第一に云わく「止觀の明靜なることは、前代に

いまだ聞かず」等云々。弘の一に云わく「漢の明帝、夜夢み

しより陳朝に泊ぶまで○禪門に予かり廁わつて、衣鉢伝授

する者」等云々。補注に云わく「衣鉢伝授とは、達磨を指す」

等云々。止の五に云わく「また一種の禪人乃至盲・跛の師・

徒、一りともに墮落す」等云々。止の七に云わく「九つの

意、世間の文字の法師と共にならず。また事相の禪師と共にな

らす。一種の禪師はただ觀心の一意のみ有り。あるいは浅く、

いつわ

よ

こここの
まつた

な

そらごと

あるいは偽る。余の九つは全く無し。これ虚言にあらず。
後賢、眼有らん者は、當に証知すべきなり」。弘の七に云わ
く『文字の法師』とは、内に觀解無くしてただ法相のみを
構う。『事相の禪師』とは、境智を閑わずして鼻隔に心を止
む乃至根本有漏定等なり。『一師はただ觀心の一意のみ有
り』等とは、これはしばらく与えて論をなす。奪えば則ち
觀解ともに闕く。世間の禪人はひとえに理觀を尚ぶ。既に
教を諳んぜざれば、觀をもつて經を消し、八邪八風を數
えて丈六の仏となし、五陰三毒を合して名づけて八邪と

ろくにゅう

ろくつう

しだい

したい

なし、六入をもつて六通となし、四大をもつて四諦となす。

かくのことく經を解するは偽の中の偽なり。何の浅きをか

るんとううんぬんしかんしちいむかしがようらくぜんじ

論ずべけん」等云々。止觀の七に云わく「昔、鄴・洛の禪師、

名は河海に播き、住するときんば四方雲のどくに仰ぎ、さ

去るときんば阡陌群を成し、隱々轟々たり。また何の利益か

ある。臨終に皆悔ゆ」等云々。弘の七に云わく『鄴・洛の

禪師』とは、『鄴』は相州に在り。即ち齊・魏の都する

所なり。大いに仏法を興す。禪祖の一めなり、その地を王化

す。時の人之意を護つて、その名を出ださず。『洛』は即

す。ひとここらまもないらくなうけすなわすなわ

とき

ひと

ここら

まも

な

い

らく

な

すなわ

らくよう とううんぬん ろつかん はつないおんぎょう い くきょう ところ
ち洛陽なり」等云々。六卷の般泥洹經に云わく「究竟の処
を見ずとは、彼の一闡提の輩の究竟の惡業を見ざるなり」
とううんぬん みょうらくい か いつせんだい やから くきょう あくびう み
等云々。妙樂云わく「第三は最も甚だし。転た識り難き
ゆえ とう
が故に」等。
むげん もの いちげん もの じやけん もの まつぽう はじ さんるい み
無眼の者・一眼の者・邪見の者は、末法の始めの三類を見
いちぶん ぶつけん え 者
るべからず。一分の仏眼を得るもの、これをしるべし。
こくおう だいじん ばらもん こじ む とううんぬん とうしゅん
「国王・大臣・婆羅門・居士に向かつて」等云々。東春に
い くじよ む ほう そし ひと ぼう とううんぬん そ
云わく「公処に向かつて法を毀り人を謗す」等云々。夫れ、
むかし ぞうほう まつ ごみよう しゅえんとう そうじょう 捧
昔、像法の末には護命・修円等、奏狀をささげて伝教大師
でんぎょうだいし

ざんそう　いま　まつぱう　はじ　りょうかん　ねんあとう　ぎしょ　しる
を讒奏す。今、末法の始めには良觀・然阿等、偽書を注して將軍家にささぐ。あに三類の怨敵にあらずや。
とうせい　ねんぶつしやとう　てんだい　ほつけしゅう　だんな　こくおう　だいじん
当世の念佛者等、天台法華宗の檀那の国王・大臣・
ばらもん　こじとう　む
婆羅門・居士等に向かつて云わく「法華經は理深く、我ら
げわざ　ほう　いた　ふか　き　いた　あさ　とう　もう
は解微かなり。法は至つて深く、機は至つて浅し」等と申し
疎　たか　しようきょう　お
うとむるは、「高く聖境を推して、己が智分にあらずとす」
もの　ぜんしゅうい　おの　ちぶん
の者にあらずや。禪宗云わく「法華經は月をさす指、禪宗
つき　つき　ゆび　ほけきよう　つき
は月なり。月をえて、指なにかせん。禪は仏の心、法華經
ほとけ　みこと　ほとけ　ほけきようとう　いつさいきょう　たま　のち
は仏の言なり。仏、法華經等の一切經をとかせ給いて後、

さいご いち 房 はな かしょういちにん 授 証

最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさずく。そのしるし
に、仏の御袈裟を迦葉に付囁し、乃至、付法藏の二十八・
六祖までに伝う」等云々。これらの大妄語、國中を誑醉せ
しめてとしひさし。

年 久

また、天台真言の高僧等、名はその家にえたれども、我が
宗にくらし。貪欲は深く、公家・武家をおそれで、この義
を証伏し讚歎す。昔の多宝・分身の諸仏は、法華經の
令法久住を證明す。今の天台宗の碩徳は、理深解微を
証伏せり。かるがゆえに、日本国にただ法華經の名のみあ
しようと

しようぶく

にほんこく

ほけきょう

な

つて、得道の人一人もなし。誰をか法華経の行者とせん。

寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶はかずをしらず。公家・武家に誤つてにくまるる高僧これ多し。これらを法華経の行者というべきか。

仏語むなしからざれば、三類の怨敵すでに國中に充満せり。金言のやぶるべきかのゆえに、法華経の行者なし。いかんがせん、いかんがせん。

そもそも、たれやの人か衆俗に悪口・罵詈せらるる。誰の僧か刀杖を加えらるる。誰の僧をか法華経のゆえに公家・

武家に奏する。誰の僧か「しばしば擯出せられん」と度々
ながさるる。日蓮より外に日本国に取り出ださんとするに
人なし。

日蓮は法華経の行者にあらず。天これをすて給うゆえに。
誰をか当世の法華経の行者として仏語を実語とせん。仏
と提婆とは身と影とのごとし。生々にはなれず。聖徳太子
と守屋とは蓮華の華菓同時なるがごとし。法華経の行者あ
らば、必ず三類の怨敵あるべし。三類はすでにあり。法華経
の行者は誰なるらん。求めて師とすべし。一眼の龜の浮き

木に値うなるべし。

ぎ あ

ひとい

とうせい

さんるい

あ

似

ある人云わく、当世の三類はほぼ有るににたり。ただし
ほけきょう ぎょうじや なんじ ほけきょう ぎょうじや

法華経の行者なし。汝を法華経の行者といわんとすれば、

おお

そ う い

き ょ う

い

てん

もろもろ

ど う じ

大いなる相違あり。この経に云わく「天の諸の童子は、

きゅうし

とうじよう

くわ

どく

がい

あた

もつて給使をなさん。刀杖も加えず、毒も害すること能わ

とう

ひ と

にく

の

くち

すなわ

へいそく

のち

ぜんしょ

しう

じ」。また云わく「もし人、惡み罵らば、口は則ち閉塞せ

とう

げんせあんのん

のち

ぜんしょ

しう

えだ

ん」等。また云わく「現世安穩にして、後に善処に生ぜん」

とううんぬん

こうべわ

しちぶん

な

等云々。また「頭破れて七分に作ること、阿梨樹の枝のご

い

げんせ

ふくほう

とくならん」。また云わく「また現世において、その福報を

得ん」等。また云わく「もしまだこの經典を受持せん者を
見て、その過惡を出ださば、もしさは實にもあれ、もしさは不實

にもあれ、この人は現世に白癩の病を得ん」等云々。

答えて云わく、汝が疑い大いに吉し。ついでに不審を晴

らさん。不輕品に云わく「惡口・罵詈」等。また云わく「あ

るいは杖木・瓦石をもつて、これを打擲す」等云々。

涅槃經に云わく「もしさ殺し、もしさ害せん」等云々。法華經

に云わく「しかもこの經は、如來の現に在すすらなお怨嫉
多し」等云々。

ほとけ こゆび だいば

くおう だいなん あ たも

仏は小指を提婆にやぶられ、九横の大難に值い給う。こ

ほけきょう ぎょうじや

ふきょうぼさつ いちじょう ぎょうじや

れは法華経の行者にあらずや。

不輕菩薩は一乗の行者と

もくれん ちくじょう ころ

ほけきょうきべつ のち

いわれまじきか。目連は竹杖に殺さる。

法華経記別の後なり。

付法藏の第十四の提婆菩薩、第二十五の師子尊者の二人

ひと ころ

ほけきょう ぎょうじや

は人に殺されぬ。これらは法華経の行者にはあらざるか。

じく どうしよう そざん なが

ほうどう かなやき かお 燒

こうなん

竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面にやいて江南

移

きたのてんじん はくきよい

ほけきょう ぎょうじや

にうつさる。北野天神、白居易これらは法華経の行者ならざるか。

こと

こころ

あん

ぜんじょう

ほけきょうひぼう

つみ

事の心を案ずるに、前生に法華経誹謗の罪なきもの

今生に法華經を行ず、これを世間の失によせ、あるいは罪
なきをあだすれば、たちまちに現罰あるか。修羅が帝釈を
いる、金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返つて一時に損ずる
がごとし。天台云わく「今の我が疾苦は皆過去に由る。今生
の修福は報、将来に在り」等云々。心地觀經に云わく「過去
の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未來の果を知
らんと欲せば、その現在の因を見よ」等云々。不輕品に云わ
く「その罪は畢え已わつて」等云々。不輕菩薩は、過去に
法華經を謗じ給う罪身に有るゆえに、瓦石をかぼるとみえ
なきをあだすれば、たちまちに現罰あるか。修羅が帝釈を
いる、金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返つて一時に損ずる
がごとし。天台云わく「今の我が疾苦は皆過去に由る。今生
の修福は報、将来に在り」等云々。心地觀經に云わく「過去
の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未來の果を知
らんと欲せば、その現在の因を見よ」等云々。不輕品に云わ
く「その罪は畢え已わつて」等云々。不輕菩薩は、過去に
法華經を謗じ給う罪身に有るゆえに、瓦石をかぼるとみえ

たり。

また、順次生に必ず地獄に墮つべき者は、重罪を造る

とも現罰なし。一闡提人これなり。涅槃經に云わく「迦葉

菩薩、仏に白して言さく『世尊よ、仏の所説のごとく、

大涅槃の光、一切衆生の毛孔に入る』と等云々。また云

わく「迦葉菩薩、仏に白して言さく『世尊よ、いかんぞ、

いまだ菩提心を發さざる者、菩提の因を得ん』と等云々。

仏この問い合わせて云わく「仏、迦葉に告げたまわく『も

しこの大涅槃經を聞くことあつて、私は菩提心を發すこと

を用いざと言つて正法を誹謗せん。この人、即時に夜の夢
の中において羅刹の像を見て心中に怖畏す。羅刹語つて
言わく、咄いかな、善男子よ。汝今もし菩提心を發さず
んば、當に汝が命を斷つべしと。この人惶怖し、寤め已わ
つて、即ち菩提の心を發す○當に知るべし、この人はこ
れ大菩薩なり』と等云々。いどうの大惡人ならざる者の
正法を誹謗すれば、即時に夢みてひるがえる心生ず。
また云わく「枯木・石山」等。また云わく「熑れる種甘雨
に遇うといえども」等。また「明珠淤泥」等。また云わく

「人の手に創あるに、毒薬を捉るが」とし 等。また云わ
く「大雨、空に住せず」等々。これらの多くの譬えあり。
詮ずるところは、上品の一闡提人になりぬれば、順次生に
必ず無間獄に墮つべきゆえに現罰なし。例せば、夏の桀・殷
の纣の世には天変なし。重科有つて必ず世ほろぶべきゆ
えか。

また守護神この国をすつるゆえに現罰なきか。謗法の世
をば守護神すてて去り、諸天まぼるべからず。かるがゆえ
に、正法を行づるものにしてしなし。還つて大難に值う

こんこうみようきょう い

ぜんざう しゆ

もの

ひび

すいげん

べし。金光明經に云わく「善業を修する者は日々に衰減す」
とううんぬん あつこく あくじ
りつしょうあんこくろん

等云々。悪國・悪時これなり。つぶさには立正安國論に
かんがえたるがごとし。

勘

せん

てん

捨

たま

しょなん

遭

しんみよう

ご

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を期

しんし ろくじつこう

ぼさつ ぎょう

たい

こつげん ばらもん

こつげん ばらもん

ばらもん

ご

とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の
責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の塵をふる、

あくちしき

あ

ぜん

つ あく

ほけきよう

捨

ご

悪知識に值うゆえなり。善に付け惡につけ、法華經をすつる

じごく ごう

だいがん

た

ひほんこく くらい

譲

は地獄の業なるべし。大願を立てん。日本國の位をゆづら

ほけきよう

かんぎようとう

期

ふ ぼ

くび

ん、法華經をすてて觀經等について後生をさせよ、父母の頸

は

ねんぶつもう

しゅじゅ

だいなんしゅつたい

を刎ねん、念仏申さずばなんどの種々の大難出来すとも、
ちしゃ わ ぎ
ちり もち
ほか だいなん かぜ

智者に我が義やぶられずば用いじとなり。その外の大難、風
まえ ちり
われにほん はしら
われにほん がんもく
われにほん ねが
誓 破
とう ほ
の前の塵なるべし。我日本の柱とならん、我日本の眼目と
ならん、我日本の大船とならん等とちかいし願いやぶるべからず。
うたが い
なんじ るざい しざいとう
かこ

疑つて云わく、いかにとして汝が流罪・死罪等を過去の
しゆくじゅう 知
い
どうきょう しきぎょう
あらわ
かこ

宿習としらん。

こた

い

どうきょう

しきぎょう

あらわ

しんおうけんぎ

かがみ

答えて云わく、銅鏡は色形を顯す。秦王驗偽の鏡は
げんざい つみ あらわ
ぶっぽう かがみ
かこ ごういん
あらわ
現在の罪を顯す。仏法の鏡は過去の業因を現す。
かがみ

はつないおんきょう い ぜんなんし かこ むりよう しょざい
般泥洹經に云わく「善男子よ。過去にかつて無量の諸罪、
しゅじゅ あくごう つく もろもろ ざいほう きょうう
種々の悪業を作るに、この諸の罪報は○あるいは軽易せ
られ、あるいは形狀醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求
むるに利あらず、貧賤の家・邪見の家に生まれ、あるいは
おうなん あ ひんせん いえ じやけん いえ う
王難に遭い、および余の種々の人間の苦報あらん。現世に輕
う しゅじゅ にんげん くほう げんせ かる
く受くるは、これ護法の功德力に由るが故なり」等云々。
きょうもん にちれん み ごほう くどくりき よ ゆえ
この経文、日蓮が身にあたかも符契のごとし。狐疑の冰
解 せんまん なん よし いちいち く わ み 合
とけぬ。千万の難も由なし。一々の句を我が身にあわせん。
きょうい とううんぬん ほけきょう い
「あるいは軽易せらる」等云々。法華經に云わく「軽賤憎嫉」

とううんぬん にじゅうよねん あいだ きょうまん
等云々。一十余年が間の輕慢せらる。「あるいは
ぎょうじょうしゆる えぶくた よ み おんじき
形狀醜陋」、また云わく「衣服足らず」、予が身なり。「飲食
そそ よ み たから もと り よ み
麤疎」、予が身なり。「財を求むるに利あらず」、予が身な
り。「貧賤の家に生まる」、予が身なり。「あるいは王難に遭
ひんせん いえ う きょうもん ひどうたが よ み おうなん あ
う」等、この経文、人疑うべしや。法華経に云わく「し
ばしば擯出せられん」。この経文に云わく「種々」等云々。
ごほう くどくりき よ ゆえ とう しゅじゅ とううんぬん
「これ護法の功德力に由るが故なり」等とは、摩訶止觀の
だいご い さんぜんみじやく どう あた まかしかん
第五に云わく「散善微弱なるは動ぜしむること能わず。今、
しがん しゅ ごんぴようか しようじ りん どう とううんぬん
止觀を修して健病虧けざれば、生死の輪を動ず」等云々。

また云わく「三障四魔、紛然として競い起くる」等云々。
い
さんしょうしま ふんぜん きそ お とううんぬん

我、無始よりこのかた、魔王と生まれて、法華経の行者
われ むし えじき でんぱたとう うば 取
あくおう う ほけきょう ぎょうじや

の衣食・田畠等を奪いとりせしこと、かずしらず。当世
にほんこく しょにん ほけきょう さんじ う ほけきょう ぎょうじや とうせい
にほけきょう さんじ う ほけきょう ぎょうじや とうせい

日本国の諸人の、法華経の山寺をたおすがごとし。また
ほけきょう ぎょうじや くび は ほけきょう さんじ 倒
ほけきょう さんじ う ほけきょう ぎょうじや とうせい

法華経の行者の頸を刎ぬること、その数をしらず。これら
じゅうざい 果 かず

の重罪、はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。
よざん 果 尽 とき かなら
じゅうざい 果 しうつり とき かなら

果たすも、余残いまだつきず。生死を離るる時は、必ずこ
じゅうざい 消 果 しうつり とき かなら
じゅうざい 果 しうつり とき かなら

の重罪をけしほてて出離すべし。功德は浅軽なり、これ
じゅうざい ぎょう とき せんきょう

らの罪は深重なり。権経を行ぜしには、この重罪いま
つみ じんじゅう とき せんきょう
じゅうざい ぎょう とき せんきょう

起

くろがね

や

甚

鍛

かく

だおこらす。鉄を熱くにいとうきたわざれば、きず隠れて

見

たびたび 責

現

あさみ

搾

みえず。度々せむれば、きずあらわる。麻の子をしぶるに、

責

あぶらすく

つよくせめざれば、油少なきがごとし。

今、日蓮、強盛に国土の謗法を責むればこの大難の来る

かこ

じゅうざい

こんじょう

ごほう

まね

い

だいなん

きた

は、過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし。

くろがね

こくど

くろ

ひ

あ

鉄の火に值わざれば黒し、火と合ひぬれば赤し。木をも

はやきながれ

搔

なみやま

ねむ

しお

て

付

あか

き

つて急流をかけば、波山のごとし。睡れる師子に手をつく
れば大いに吼ゆ。

おお

ほ

ねはんぎよう

い

たと

ひんによ

こけ

くご

ものあ

涅槃経に云わく「譬えば貧女のごとし。居家、救護の者有

くわ
びょうく けかち せ
ることなく、加うるにまた、病苦・飢渴の逼むるところと
なつて、遊行・乞丐す。他の客舎に止まり、寄つて一子を
しょう きやくしゃ しゅ くちく さ
生ず。この客舎の主、驅逐して去らしむ。その産してい
ひき
まだ久しうからず、この児を携え抱いて他国に至らんと欲し、
りゆうろ
その中路において、悪風雨に遇つて、寒苦並び至り、多く
あくふうう あ
かんくなら いた
か
あぶ はち
いらむし
どくちゅう
す
く
蚊・虻・蜂・蟻の喫い食うところとなる。恒河に
けいゆ こ いだ わた
みずひょうしつ
はな す
逕由し児を抱いて渡る。その水漂疾なれども、放ち捨てず。
ぼし
もつ
ここにおいて、母子ついにともに没しぬ。かくのごとき女人
じねん くどく
みようじゅう のちほんてん しよう
は慈念の功德もて命終の後梵天に生ず。文殊師利よ。も

し善男子有つて正法を護らんと欲せば○彼の貧女の恒河
に在つて子を愛念するがために身命を捨つるがごとくせ
よ。善男子よ。護法の菩薩もまた応にかくのごとくなるべ
し。むしろ身命を捨てよ○かくのごときの人、解脱を求め
ずといえども、解脱に自ずから至ること、彼の貧女の梵天を
求めざれども、梵天に自ずから至るがごとし」等云々。
この経文は、章安大師、三障をもつて釈し給えり。そ
れを見るべし。「貧人」とは、法財のなきなり。「女人」と
は、一分の慈ある者なり。「客舎」とは、穢土なり。「一子」

とは、法華經の信心、了因の子なり。「舍の主、驅逐す」

るざい

さん

ひさ

ほけきょう

しんじん

りょういん

こ

しゃ

しゅ

くちく

とは、流罪せらる。「その産していまだ久しからず」とは、

しん

久

るざい

ちよくせん

いまだ信じてひさしからず。「惡風」とは、流罪の勅宣な

か

あぶ

とう

もうもろ

むち

ひと

あつく

めりとう

り。「蚊・虻」等とは、「諸の無智の人の、惡口・罵詈等す

あ

は

ぼ

しども

もつ

つい

ほけきょう

るもの有らん」なり。「母子共に没す」とは、終に法華經の

しんじん

破

こうべ

は

信心をやぶらざして頭を刎ねらるるなり。「梵天」とは、

ぶっかい

う

仏界に生まるるをいうなり。

いんごう

もう

ぶっかい

変

にほん

かんど

ばんごく

しょんじん

引業と申すは、仏界まかわらず。日本・漢土の万国の諸人

ころ

びぎやく

ほうぼう

むけんじごく

お

よ

を殺すとも、五逆・謗法なれば、無間地獄には墮ちず。余

あくどう　　たさい　　経　　しきてん　う
の悪道にして多歳をふべし。色天に生まるること、万戒を持
てども万善をすすれども、散善にては生まれず。また梵天王
となること、有漏の引業の上に慈悲を加えて生ずべし。今
この貧女が子を念うゆえに梵天に生まるるは、常の性相に
は相違せり。章安の一はあれども、詮ずるところは子を念
う慈念より外のことなし。念を一境にするは、定に似た
り。専ら子を思うは、また慈悲にもにたり。かるがゆえに、
他事なけれども天に生まるるか。

まんぜん　修　　さんぜん　う
まんかい　たも　　ぼんてんのう　いま
ほんてん　う　　しおうそう

ひんによ　こ　　おも　　じねん　ほか
うる　いんごう　うえ　じ　ひ　くわ　　じょう

こう　いづきよう　じよう　に　　じねん　ほか
おも　じひ　似　　ねん　いづきよう　せん

たじ　　てん　う　　もつぱ　こ　　おも

ほとけ　成　　みち　　けごん　ゆいしんほつかい
さんろん　はっぷ　ほつそう

ゆいしき

しんごん

ごりんかんとう

じつ

かな

見

の唯識、真言の五輪觀等も実には叶うべしともみえず。た

だ天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。この一念

さんぜん

われ

いちねんさんぜん

ほとけ

みち

いちねん

三千も我ら一分の慧解もなし。しかれども、一代経々の中

きょう

いちねんさんぜん

たま

懐

よきよう

り

たま

にはこの経ばかり一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉

似

すな

擁

あぶら

しゃくによ

こ

たま

にはこの経ばかり一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉

似

しおきよう

ちしゃ

ほとけ

懐

よきよう

り

たま

にはこの経ばかり一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉

きがごとし。諸経は智者なお仏にならず、この経は愚人も

ふついん

う

げだつ もと

げだつ

おの

いた

いた

仏因を種うべし。「解脱を求めずとも、解脱に自ずから至る」

とううんぬん

等云々。

われ

わ

でし

しょなん

うたが

こころ

じねん

我ならびに我が弟子、諸難ありとも疑う心なくば、自然

に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。現世の
安穏ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕教えしか
ども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならいは、
約束せし事をまことの時はわするるなるべし。

妻子を不便とおもうゆえ、現身にわかれんことをなげく
らん。多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか、
仏道のためにはなれしか。いつも同じわかれなるべし。我、
法華経の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返つて
みちびけかし。

導

うたが
疑

い

ねんぶつしや
ぜんしゅうとう
むけん
もう

あらそ

お

ほけきよう

き

う

こうる

心あり。

修羅道にや墮つべかるらん。

また法華經の

ほけきよう

あんらくぎょうほん
い

ねが
ひと
きょうてん
とが
と

きょうもん

安樂行品に云わく「樂つて人および經典の過を説かざれ。

また諸余の法師を輕慢せざれ」等云々。

汝この經文に

そういう

相違するゆえに、天にすてられたるか。

こた

い

しゃく

い

そ

ほとけ

りょうせつ

いち

答えて云わく、止觀に云わく「夫れ、仏に両説あり。一

しよう

に

しゃく

い

あんらくぎょう

ぎ

ちようたん

しよう

い

には攝、二には折なり。安樂行に『長短を称せざれ』

しよう
だいきょう

い

とうじょう

しゅうじ

い

といふがごときは、これ攝の義なり。大經に『刀杖を執持

ないしくび

き

しゃく

ぎ

よだつみち

こと

し乃至首を斬れ』といふは、これ折の義なり。与奪途を殊

にすといえども、ともに利益せしむ」等云々。

ぐけつ
い

そ

ほとけ
りょうせつ

とう
だいきよう

とううんぬん
せんよ

弘決に云わく「夫れ、仏に両説あり」等とは○『大經

とうじょう
しゅうじ

まも
もの

に刀杖を執持す』とは、第三に云わく『正法を護る者は、

だいさん
い

だいさん
い

ないし
しも

もん
せんよ

五戒を受けず、威儀を修せず』○『乃至』より下の文は、仙予

ごかい
う

もん

しま
い

い

国王等の文なり。また『新医禁めて云わく、もしさらにな

まさ
くび
た

くび
た

とう
ふた

すことあらば、當にその首を断つべし』と、かくのことき等

もん
い

はほう
ひと

しゃくぶく
いつさい

きょうろん
ふた

ふた

の文、ならびにこれ破法の人を折伏す。一切の經論この二
つを出でず』等云々。

もんぐ
い

と

だいきよう
だいきよう

こくおう
しんぶ

ゆみ
じ

文句に云わく「問う。大經には、國王に親付し弓を持し

や　　たい　　あくにん　　さいぶく

あ

きょう

ごうせい

おんり

箭を帶し悪人を摧伏せよと明かす。この経は、『豪勢を遠離

けんげ

じぜん

ごうにゅうおお

そむ

し、謙下し慈善せよ』と。剛柔頑いに乖けり。いかんぞ異

こた

だいきょう

しゃくぶく　ろん

ならざらん。答う。大経はひとえに折伏を論ずれども、

いっしじ　じゅう

なん

しょうじゅな

こうべやぶ

きょう

『一子地に住す』と。何ぞかつて摄受無からん。この経

はひとえに摄受を明かせども、『頭破れて七分に作る』と。

しゃくぶくな

おのおのいったん

あ

とき

しちぶん

な

折伏無きにあらず。各一端を挙げて、時に適うのみ』等

うんぬん

云々。

ねはんきょう

しょ

い

しゅつけ

ざいけ

ほう

まも

涅槃経の疏に云わく「出家・在家、法を護らんには、そ

がんしん

しょい

と

じ

す

り

そん

だいきょう

たす

ひろ

の元心の所為を取り、事を棄て理を存して大教を匡け弘む。

ゆえ しょうほう ごじ い しょうせつ かかわ ゆえ
故に『正法を護持せんには』と言う。小節に拘らず。故
に『威儀を修せず』と言う○昔の時は平らかにして法弘ま
る。応に戒を持つべし。杖を持つことなかれ。今の時は嶮
にして法翳くる。応に杖を持つべし。戒を持つことなかれ。
今昔ともに嶮ならば、応にともに杖を持つべし。今昔と
もに平らかならば、応にともに戒を持つべし。取捨宜しき
を得て、一向にすべからず』等云々。

なんじ ふしん せけん がくしゃ たぶん どうり
汝が不審をば、世間の学者、多分は道理とおもう。いか
に諫曉すれども、日蓮が弟子等もこのおもいをすてず。

いつせんだいにん

一闡提人のごとくなるゆえに、まず天台・妙楽等の釈をい

じやなん

防

だして、かれが邪難をふせぐ。

そ しょうじゅ しゃくぶく もう ほうもん すいか ひ みず

夫れ、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水
をいとう。水は火にくむ。摂受の者は折伏をわらう。

しゃくぶく もの しょうじゅ

悲

折伏の者は摂受をかなしむ。

むち あくにん こくど じゅうまん とき しょうじゅ さき

無智・悪人の國土に充満の時は、摂受を前とす。

あんらくぎょうほん

じやち

ほうぼう

もの

おお

とき

しゃくぶく

さき

安樂行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は、折伏を前

じょうふきょうほん

たと

あつ

とき

かんすい

もち

さき

とす。常不輕品のごとし。譬えば、熱き時に寒水を用い、寒

とき ひ 好 そうもく にちりん けんぞく さむ つき く

き時に火をこのむがごとし。草木は日輪の眷属、寒き月に苦

得 しょすい げつりん しょじゅう あつ とき ほんしよう うしな
をう。諸水は月輪の所従、熱き時に本性を失う。

まっぽう しょうじゅ しゃくぶく

末法に摄受・折伏あるべし。いわゆる悪國・破法の両国
あるべきゆえなり。日本国の当世は悪國か破法の国かとし
るべし。

と い しょうじゅ ときしゃくぶく ぎょう
問うて云わく、摄受の時折伏を行ふと、折伏の時
しょうじゅ ぎょう りやく

摂受を行ふと、利益あるべしや。

こた い ねはんぎょう い かしうぼさつ ほとけ もう
答えて云わく、涅槃經に云わく「迦葉菩薩、仏に白して

もう によらい ほっしん こんどう ふえ
言さく〇『如來の法身は金剛不壞なり。しかるにいまだ所因
し あた ほとけのたま かしよう よ しょうほう

を知ること能わず、いかん』。仏言わく『迦葉よ。能く正法

ごじ　いんねん　こんじょうしん　じょうじゅ　ゆえ
を護持する因縁をもつての故に、この金剛身を成就すること
とを得たり。迦葉よ。我、正法を護持する因縁もて、今この
金剛身を成就することを得たり。常住にして壊れず。
善男子よ。正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修
せず、応に刀劍・弓箭を持すべし○かくのごとく種々に法
を説くも、しかもなお師子吼すること能わず○非法の悪人
を降伏すること能わず、かくのごとき比丘、自利しおよび
衆生を利すること能わず。當に知るべし、この輩は懈怠・
懶惰なり。能く戒を持ち淨行を守護すといえども、當に知
らんだよ　かい　たも　じょうぎょう　しゅご　まさ　し

るべし、この人は能くなすところなからん乃至時に破戒の
者有つてこの語を聞き已わつて、みな共に瞋恚してこの
法師を害せん。この説法の者、たといた命終すとも、
なお持戒・自利利他と名づく』と等云々。章安云わく「取捨
宜しきを得て、一向にすべからず」等。天台云わく「時に適
うのみ」等云々。譬えば、秋の終わりに種子を下ろし田畠を
かえさんに、稻米をうることかたし。

かえさんには、稻米をうることかたし。

建仁年中に法然・大日の二人出来して、念佛宗・禅宗
を興行す。法然云わく「法華経は末法に入つては、いまだ

いにん う もの あ せん なか ひと な とううんぬん だいにちい
一人も得る者有らず、千の中に一りも無し」等云々。大日云
わく「教外に別伝す」等云々。この両義、国土に充滿せり。
てんだいしんごん がくしゃとう ねんぶつ ぜん だんな りょうぎ こくど じゅうまん 詔 恐
天台真言の学者等、念佛・禪の檀那をへつらいおそるること
いぬ あるじ 尾 振 ねこ 恐
と、犬の主におをふり、ねずみの猫をおそるがごとし。
こくおう しょうぐん 宮 仕 はぶっぽう いんねん はこく いんねん よ
国王・将軍にみやづかい、破仏法の因縁、破国の因縁を能
と よ あび まね てんだいしんごん がくしゃとう こんじょう
く説き、能くかたるなり。天台真言の学者等、今生には
がきどう お ごしよう あび まね さんりん 交
餓鬼道に墮ち、後生には阿鼻を招くべし。たとい山林にまじ
わつて一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油を
じき しようしゃく にもん わきま

かでか生死を離るべき。

しょうじ はな

問うて云わく、念佛者・禅宗等を責めて彼らにあだまれ
たる、いかなる利益があるや。

と

い

ねんぶつしや ぜんしゅうとう

せ かれ

せ

か

怨

たる、いかなる利益があるや。

りやく

こた

い

ねほんぎょう い

い

ぜんび く

ほう

答えて云わく、涅槃經に云わく「もし善比丘あつて、法を
壊る者を見て、置いて、呵責し驅遣し挙処せば、當に知
るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く驅遣し呵責し
挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」等云々。「仏法を

やぶ

み

お

かしやく くけん

こしょ

まさ

し

かしやく

かしやく

よ

くけん

かしやく

かしやく

壊乱するは、仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、
これ彼が怨なり。能く糾治せんは、これ護法の声聞、真の我

えらん

ぶつぱう

なか

あだ

あだ

じょ

くけん

とううんぬん

ぶつぱう

ぶつぱう

か

あだ

よ

きゅうじ

いづわ

した

ぶつぱう

ぶつぱう

これ彼が怨なり。能く糾治せんは、これ護法の声聞、真の我

ごほう

しょうもん

しん

わ

が弟子なり。彼がために惡を除くは、即ちこれ彼が親なり。

能く呵責せんは、これ我が弟子なり。驅遣せざらんは、仏法の中の怨なり」等云々。

夫れ、法華經の宝塔品を拝見するに、釈迦・多宝・十方分身の諸仏の来集はなに心ぞ。「法をして久しく住せしめん

が故に、ここに來至したまえり」等云々。三仏の未来に

法華經を弘めて未來の一切の仏子にあたえんとおぼしめす御心の中をすいするに、父母の一子の大苦に值うを見るよ

りも強盛にこそみえたるを、法然いたわしともおもわで、

まつぱう ほけきょう もん かた ひと い 塞 きょうじ
末法には法華経の門を堅く閉じて人を入れじとせき、狂兒
をたばらかして宝をすてさするように、法華経を抛てさ
誑 たから 捨 ほけきょう なげう
せける心こそ無慙に見え候え。我が父母を人の殺さんに、
父母につげざるべしや。悪子の醉狂して父母を殺すを、せい
せざるべしや。悪人、寺塔に火を放たんに、せいせざるべし
や。一子の重病を炎せざるべしや。日本の禪と念佛者と
を見てせいせざるものは、かくのごとし。「慈無くして詐り
親しむは、これ彼が怨なり」等云々。
親 した かれ あだ とううんぬん
にほん ぜん ねんぶつしや
じな いつわ
にちれん にほんこく しょにん
主 師 親

日蓮は日本国の諸人にしゆうし父母なり。

いつさい てんだいしゅう ひと かれ だいおんてき
一切の天台宗の人は彼らが大怨敵なり。「彼がために悪
を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。無道心の者、生死
をはなるることはなきなり。

離

きょうしうしゃくそん いつさい げどう だいあくにん めり
教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給い、
てんだいだいし なんぼく とくいつ さんずん した ごしゃく み
天台大師の南北ならびに得一に「三寸の舌もて五尺の身を
断 とう 言 たま みな ほけきよう きいちょう とうと
たつ」と、伝教大師の南京の諸人に「最澄いまだ唐都を
見ず」等といわれさせ給いし、皆、法華經のゆえなればはじ
ならず。愚人にはめられたるは第一のはじなり。日蓮が

恥

ぐにん

裏

だいいち

たま

にちれん

恥

ごかんき

被

てんだいしんごん

ほつしどう

よろこ

思

御勘氣をかばれば、天台真言の法師等、悦ばしくやおもう

無 慈

奇 怪

らん。かつはむざんなり、かつはきかいなり。

そ しゃくそん しゃば い らじゅう しん い でんぎょう しな

夫れ、釈尊は婆婆に入り、羅什は秦に入り、伝教は尸那

い だいば しおみ さへ

に入り、提婆・師子は身をすつ。藥王は臂をやく。上宮は

て かわ 剥 しゃかぼさつ にく 壳

とき かな

手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。

てんだい い とき かな とううんぬん ぶっぽう とき

天台云わく「時に適うのみ」等云々。仏法は時によるべし。

にちれん るざい こんじょう しょうく

日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には

ごしよう

だいらく 受 おお よろこ 敦

大樂をうくべければ大いに悦ばし。